

帽子と電動

～三澤了の軌跡～



三澤了さんの遺志を継ぐ会

(2014年4月21・22日)

もくじ

メッセージ

障害を人生の糧とした君へ	山田昭義	1
追悼メッセージ	ジュディ・ヒューマン	2
追悼メッセージ	レイチェル・ハースト	3
追悼メッセージ	横路孝弘	4
三沢了さんへ	土本秋夫	5

当事者運動と三澤さん

三澤了君を偲ぶ	山田昭義	6
頸損連絡会、そして電動車いす	今西正義	8
自立生活運動と三澤さん	中西正司	10
ひとつの時代	太田修平	12
三澤さんとともに歩んだ1980年代	白石清春	14
交通アクセス行動と三澤さん	尾上浩二	16
「政策研究・提言活動」と三澤さん	奥山幸博	18
2002年DPI世界会議札幌大会の国際的意義	中西由起子	19
2002年DPI世界会議札幌大会の国内的意義	西村正樹	20
三澤さんの一言 ～2004年10・20大行動～	佐藤 聡	21
～想いを馳せる～ 三澤さんの呼びかけで発足した 「東北関東大震災障害者救援本部」	今村 登	23
障害者権利条約と三澤さん	崔 榮繁	24
最後の講義「交通アクセスの歴史」	伊藤秀樹	26

三澤さんの言葉

DPI日本会議の足跡(事務局こぼれ話)	三澤 了	28
障害者運動と次世代への期待	三澤 了	36
三澤さんの闘病 ～お姉さん、三澤里子さんのお話～		46
三澤了さんの略歴	宮本泰輔	48
資料1 自立について 頸損連、会員への手紙		50
資料2 横田弘氏との対談		52
(機関誌特集：障害者の「生」と「尊厳死」より転載)		
「三澤了さんの遺志を継ぐ会」の趣旨へご賛同いただいた皆さま		56

題名：「帽子と電動 ～三澤了の軌跡～」

作成：2014年4月21・22日「三澤了さんの遺志を継ぐ会」実行委員会編集班

障害を人生の糧とした君へ

DPI日本会議議長
山田昭義



(三澤了さんの遺志を継ぐ会実行委員会

共同代表：今西正義・中西正司・山田昭義を代表して [写真同順])

青春時代、不慮の事故により四肢の自由を全く失い、福祉機器も満足になく、家に閉じこもって寝たきりに近い時代を経て、自らの人生を一步ずつ切り拓いた君。財にも勲章にも振り返らず、働き続け、君は人生において一番大事なものを獲得しました。

同じように四肢の自由がないことで、夢や希望が持てずに悶々としていた仲間たちも、君の活動する姿を見て、一筋の夢と希望を持つことができました。社会が障害をマイナスにしか捉えない時代に、君は敢然と立ち向かい、社会こそが障害を創り出しているのだということを身をもって示し、わが国に新しい価値観を創りました。そして今、君の示した価値観を誰もが認める時代になりました。

いつも前を向き、留まることを知らず、常に前進し続けた君。権力におもねることなく、仲間の目線に立ち、ひたすら仲間たちと共に闘い、40年の歳月を経て、その夢と希望は見事に開花しました。

人生の最後まで闘い、残念ながら病に倒れましたが、四肢に障害があったからこそあなたの人生は輝き、誰にも劣らない人生を創ったといえるでしょう。今、全国の仲間たちから、君に輝く勲章と栄誉を贈ります。ありがとう。

メッセージ

ジュディ・E・ヒューマン
アメリカ合衆国国務省
国際的な障害者の権利に関する特別顧問
Judith E. Heumann
Special Advisor for International Disability Rights
U.S. Department of State

日本の障害者コミュニティー、そして三澤様のご家族に対し、お悔やみ申し上げます。長年にわたって三澤様の友人であったことは、私にとって名誉なことであります。彼は、その長年にわたる業績で、尊敬を集めてきました。彼がいなくなることで、さびしくなることでしょう。障害者の権利を改善するために彼が取り組んできたことを、私たちが引き継いでいこうではありませんか。

[訳：宮本泰輔]

My deepest condolences to the Japanese disability community and to the family of Mr. Misawa. It has been a privilege for me to have known Mr. Misawa for many years. He was respected for his work over many years. He will be missed. May we commit ourselves to continuing his work to improve the rights of persons with disabilities.



三澤さんとヒューマンさん。2002年第6回DPI世界会議札幌大会にて



メッセージ

レイチェル・ハースト
イギリス障害啓発行動

Rachel Hurst
Disability Awareness in Action

親愛なる友人の皆さん、

偉大な障害活動家の喪失は、彼の家族や友人、同僚にとってだけでなく、正義と権利、そして自由のために闘っている障害のある私たち世界の家族にとって、大きな悲しみです。三澤さんがよく知っていたように、社会変革への道りは長く険しく、壁はあまりに多く越えがたく見えます。三澤さんは思いやりのある闘士、偉大なリーダーでした。すべての国の障害者の権利を広げるために、もてる力のすべてを注ぎました。彼を喪ったことを共に悲しみたいと思います。しかし、その足跡が皆さんをさらに奮い立たせ、闘争を続ける力となることを私は知っています。

勝利は我らに。団結は力なり。日本のすべての友人に愛をこめて。

[訳：浜島恭子，堀場浩平]

Dear Friends,

The passing of a great disability activist is a great sorrow, not only to his family, friends and colleagues, but to the worldwide family of disabled people who are fighting for justice, rights and freedoms. As Satoru Misawa knew only too well, the road of social change is long and hard and the barriers many and often seem insuperable. Mr Misawa was a very gallant fighter, a great leader and did all in his power to explode the truth of our rights in the face of all our nations.. We join you in mourning your loss but know that his example will spur you on to further actions and inspire you to continue the struggle. We shall overcome. Strength in Unity. With love and affection to all my friends in Japan -Rachel Hurst.

※写真は1987年11月、国連・障害者の十年(1983-1992)中間年にあたり初めて来日した際、京都にて

追悼メッセージ



衆議院議員
横路孝弘

この度、国連の「障害者の権利に関する条約」に批准できたのも三澤さんのご尽力の賜物です。

思い起こせば、この国連障害者権利条約の批准について、DPI日本会議議長であられた三澤さんを先頭に各障害者団体の皆さんから、ただ批准するのではなく、この障害者権利条約にふさわしい内容にするべき、まず国内法の整備をすることが重要である旨の要望がなされました。

三澤さんたちの要望を受け、鳩山内閣時の2009年12月に内閣府に25名中14名の障害当事者で構成する「障害者制度改革推進本部」を設置し、2011年に「障害者基本法」を改正し、次に障害者自立支援法に代わる「障害者総合福祉法」を制定し、そして集大成として「障害者差別解消法」を制定したのです。障害者施策の国内法が整備できたことから、国連の「障害者の権利に関する条約」を批准したのです。

この間、三澤さんは病と闘いながら、常に先頭に立って様々な会合や集会、デモなどに参加し、差別のないみんなが平等な社会の実現をめざし、「当事者のことは当事者の手で」と訴えておられたのです。

三澤さんの長い・長い闘いの歴史に心から敬意を表すとともに、三澤さんの遺志を継ぎ、障害者の真の自立と参加を実現し、「障害者差別解消法」の具現化を目指して、市民団体や他の障害者団体とも連携を図り、国民への普及啓発活動を積極的に行っていきましょう。



三沢了さんへ

ピープルファースト北海道会長
土本秋夫

自分たちの先頭にたってやってきた。自分のいまの福祉サービスがあるのは
さきにたちあげてきた三沢さんをはじめ、しんたいの仲間たちがやってきたこと
で、自分たちの生活ができているところもある。まだまだ しょうがいといわれ
る仲間たち、生活にむずかしい仲間たちが 福祉サービスがたりないでいること
もある。三沢さんがやってきたことは だれもが あたりまえの生活ができるよう
にと運動をしてきたことを つぎの自分がやっていかなければ、だれがやるといわ
れそうです。

こくれんしょうがいしゃの けんりじょうやく ひじゅんめざし この国の法律
をかえていっている さいちゅうですが、自分たちのおもいと ちがうところがあ
ります。自分たちは おかしいところはおかしいといていかなないと、三沢さんや
おおくの仲間たちが たたかってかちとってきたことに、まちがえはないことです。
しょうがいしゃ運動もひろめてきたことも 自分たちがやることもあります。これ
からも けいぞくはちからなりということ、いままでやってきたこともあります。

わたしたちにかんすることをきめるときは かならず わたしたちをまじえて
きめること。しょうがいしゃであるまえに 1人の人間としてあつかえと いろいろ
つけていかなないと だめだとおもます。三沢さんがやってきたしょうがいしゃ運動の
みちをつくってきたことを たえさせないために、自分たちが ひきつぐところはひ
きついでいくことだと おもいます。自分たちが かわるのじゃなく、いまの社会
をかえることです。わけへだてられてきた しゃかいではない ということです。

日本では、しょうがいしゃ運動をやってきましたが、日本いがいの国は まだ
まだ福祉サービスがないところ すくないところがある。自分たちも日本だけじゃ
ない国といっしょに やっていければとおもいます。

さいごに いのちがけでたたかってきた三沢さんをそんけいします。ありがとう
ございました。これからも いきいきのびのびゆうゆうと 仲間たちがちいき
で生活ができるよう自分もたたかっていきます。

※写真は内閣府障がい者制度改革推進会議(2011(平成23)年12月発行)改正障害者基本法<わかりやすい版>より、推
進会議で土本秋夫構成員がイエローカードを出している様子
http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/law/6laws/kihon_easy_no.html

三澤了君を偲ぶ

DPI日本会議議長
山田昭義

あなたに始めて出会ったのは、1971年5月末のこと。私が都立身障センターに通い始めて間もない時でした。職員からあなたと大須賀郁夫君を紹介され、将来が全く見えない時代に、お互い、どんな生活を創るのか、そんなことをいつも語り合いました。43年も前のことです。

時は美濃部都政が実現、都政全体がやる気に満ちていた時代でした。福祉系職員の目は輝き、わが国の福祉を俺たちで創るんだという思いが、施設を利用している私たちにも伝わり、一緒に議論を重ねたのも、今は遠い昔の話です。

私は15才で三澤君と同じ頸髄損傷による四肢マヒとなりました。受傷から13年を経過した頃、通信教育の通年スクーリングのために上京し、大学に通学しながら、毎週金曜日に都立身障センターのリハビリに通っていました。当時、三澤君は身障センターに入所をしており、大須賀君は職能訓練のために通所をしていました。私と三澤君ともう1人の仲間、そして大須賀君も加わり、将来への不安と夢を何かにつけ議論をした時代でした。

週3日の通学は大変でした。授業のほとんどが4階と3階に集中しており、当時の学校には階段に手摺りはなく、お袋におぶってもらい階段をのぼっていました。まずは私を上げ、次に車いす、そして最後に鞆とトイレ道具を上げるといった具合でした。お袋は明治生まれでしたが160cmを越し、体重も昔流で20貫を越す大柄とはいえ、当時の車いすは重量が30kgを越す重さで、私を含め3回も階段を行き来してくれたことには申し訳ない気持ちで一杯でした。それだけに週1回、タクシーを使ったリハセンター通いは楽しい時間でした。リハビリ訓練の指導は就職一年目の女性PT。しかも超ミニスカートでの訓練指導ときたものだから、若い自分にとって施設という隠遁生活から、一気に娑婆に出てきた浦島さんの気分で訓練にも熱が入りました。訓練の後、同年代の仲間との交流は大きな刺激であり、彼らとの会話は私に様々な情報と勇気を与えてくれました。

勿論その頃には、大須賀君も三澤君も私も障害者運動に身を投じるなどとは夢想だにしませんでした。特に三澤君はお母さんとお姉さんと3人で印刷業を営むという話もあり、大須賀君と私は三澤君がそこに加わることに反対をしていました。母親としては三澤君の将来の生活のためという思いが強く、お姉さんもそこに加わることは、当時の頸髄損傷者の置かれた立場から考えると、お姉さんを犠牲にしてしか仕事が成り立たないと思ったからです。大須賀君は物静かな言い方でしたが、三澤君を論していたし、私も受傷15年の先輩として多くの仲間を見てきた立場から、やはり反対をしました。三澤君自身は積極的ではなかったのですが、結局、お母さん主導で話は進んでいきました。

大学卒業後、私は名古屋に帰り、仲間に誘われ障害者運動に加わりました。やはり、大須賀君も三澤君も同じように障害者運動に身を投じました。リハセンターでは個人的な将来の話はいっぱいしましたが、障害者運動について話し合った記憶はありません。

障害者運動に関わってからは、地域も方法も違いましたが、以後、障害者運動について時として口角泡を飛ばし議論を重ねるようになっていました。大須賀、三澤両氏とも、熱く語るというよりは、理路整然と語るほうでしたが、私一人が熱く、時に感情を前に出して語り合ったことも、今は昔のこととなってしまいました。

そして、縁があり1997年から私がDPI日本会議議長、三澤君が事務局長として一緒に活動をするようになりました。特に2002年のDPI世界会議札幌大会は、2人のコンビと多くの仲間の支援によって、110ヶ国・3,100余人の参加者により、大成功をおさめ、草の根運動の一つの集大成が示せたのではないかと思います。

三澤君への思いは、こうしてペンを取り始めると次から次へと思い浮かんできます。43年間の交流は取り敢えず幕を閉じましたが、いつかまた天国で、3人そろって杯を重ねましょう。



1973年、愛知県重度障害者の生活をよくする会（初代会長山田昭義）が結成され間もない頃の写真。中央が山田さん



1971年頃、都立心身障害者福祉センターの行事で外出。お姉さんの里子さん（左）と三澤さん（29歳）

頸損連絡会、そして電動車いす

DPI日本会議監事
今西正義

交通アクセスといえば、三澤さんが長年にわたりこだわり続けてきた運動であった。今では、重度の障害があっても電動車いすで電車やバスに乗り一人で動けることが当たり前となった。しかし、それまでは、駅の階段を電動車いすごと担いでもらうことなど珍しくなく、いつも危険と理不尽さを覚悟しながら電車に乗っていた。その電動車いすも1970年代は、誰でも簡単に手に入るものではなく、自分で車いすを動かさない障害者はいつも誰かに車いすを押してもらわなければどこにも行くことができなかった。

1963年(昭和38年)元旦の早朝に、三澤さんは友だちが運転する車の事故で頸髄損傷になった。大学2年生の時である。当時、まだ命を救うだけが精いっぱいでありハビリ訓練というものではなく、何もせず家へ帰った。その時、自分にはもう何もできないものと諦め、本を読んだり、俳句を作るなどして、外出も年に2～3回という隠居のような生活を続けていた。そんな世捨て人のような暮らしから別れるきっかけは、受傷から7年くらい経って、身体障害者手帳の申請をしに都立身障センターに行った時に、センターで訓練をするよう勧められたことであった。あまり期待もせずに入所したようだが、周囲で訓練をしている人たちを見ていて、自分も何かやらなければということをやったのが和文タイプであった。その後、家でお姉さんと一緒にタイプ印刷の仕事を始めることとなった。

センターでの体験は、車いす生活へ目を向かわせるようになり、家の中や外回りを改造すると外出する気にもなり、同時に考え方や意識の面で前向きに変わっていった。頸損者のように重度の者でも、ある程度の条件を整え、方策を考えれば、かなり積極的に人生を過ごせるのではないかと考え、1973年の4月頃、センターで知り合った数人の仲間と相談し、「頸損を考える会」を立上げた。私自身もその頃家に閉じこもっており、三澤さんからの呼びかけがあって加わることとなった。1975年に「頸損連絡会」と団体名を改称し、初代の会長に三澤さんが就任し1985年まで務め、頸損連絡会の基盤を作った。

この時代、障害者の施策にはこれというものがなく、その中、仙台で当事者により「生活圏拡大運動」が1969年にスタート、数年後に東京でも「生活圏拡大運動東京連絡会」が作られ、映画館や美術館・博物館などの車いすガイドブックを作成するための調査が行われた。三澤さんもボランティアに車いすを押しもらいながら点検調査に参加したのが、初めてのまちづくりの活動であったと思う。そこで、朝日新聞社厚生文化事業団が行っていた電動車いすモニター制度で配られた1台の外国製電動車いすにはじめて試乗した。この2つの出会いが、その後の三澤さんを交通アクセス運動へと駆らせる原点とされる。

それまで介助者なしに一人で動くことが出来なかった三澤さんにとって、自分の意志で動きたい時に多少の段差や坂道を気にせず自由に動ける電動車いすの体験を、自分だけのものではなく同じような状態の仲間たちにも広げたいとした。

しかし、当時、電動車いすは外国製のものしかなく高額で、とても自費で購入できるものではなかった。その頃、国でも電動車いすを日常生活用具として検討しており、1974年に予算化し、翌年東京都はいち早く取入れ交付を行った。しかし、対象を筋ジス、リウマチ、頸損

の3種に限り、また所得制限も厳しく、ほとんど人が給付を受けることができなかった。頸損連絡会では、電動車いすを獲得目標として区市の給付実態を調査し東京都と交渉を行ったが、状況は変わることはなかった。そこで責任団体の一つになり有志10人ほどで「電動車イス使用者連盟」(電使連)を1978年に発足させ、代表に三澤さんが就いた。電使連では、電動車いすの普及に向けセミナーや試乗会を開き、また厚生省の更生課とは何度も粘り強く交渉を続けた。1979年に、ようやく電動車いすを補装具の一品目に取り入れさせることができた。

これで電動車いすが障害を区別することなく給付されることとなったが、多くの問題が残されていた。まだまだ電車やバスはバリアが多く使いずらく、もっぱら電動車いすが私たちの足であった。しかし、速度は遅く、性能も悪く、動ける範囲は狭かった。

その頃の今でも忘れることができない出来事がある。三澤さんと私は意を決し、それぞれの家から電動車いすで出発して、電車に乗り、新宿で待ち合わせをしたことだった。今では何でもない普通のことだが当時としては画期的なことだった。改札が通れる階段の少ない駅に行き周りの人に手伝ってもらいながら電車に乗れたことで行動範囲が広がったことである。この体験がきっかけとなり、いつでもどこにでも自由に移動したいという思いが募っていき、交通アクセスへの運動へと繋がっていった。



1973年頃の今西さん(24歳)



1970年代、頸損連時代。左から中西正司氏、一人置いて三澤さん

自立生活運動と三澤さん

全国自立生活センター協議会副代表
中西正司

三澤さんとの付き合いは長い。交通事故で頸損になったのはお互いに大学生の頃で彼が30歳の頃に頸損連絡会の立ち上げを一緒に行った。三澤さんは、新宿の都立身障センターをベースにして立ち上げを手伝ってくれるPTの天津さんや脊損の大須賀さんなどと一緒に、呼びかけ人を集める段階で私に声をかけてきた。私は箱根療養所でリハビリ訓練中であつた。そこで療養所にいる25名の頸損者に呼びかけて頸損連絡会への加入を進めた。最初5名だった頸損連絡会の会員はそれで一挙に30名になった(1972年)。会では千葉のマザー牧場にボランティアと行ったり、一緒によく遊んだものである。

1979年には、東京都のケア付き住宅建設運営委員会の委員として東京青い芝と頸損連絡会の代表として取り組んだ。青い芝と頸損連絡会では意見に大きな溝があり、私は自立ホームの建設委員会が立ち上がる時点で脱退したが、三澤さんは我慢強い性格で最後まで青い芝と付き合い、自立ホームの住人となった。頸損連絡会の仲間たちは三澤さんが自立ホームにいつまでもいるべきではないと考え、新宿で明るい街づくりの会を主催している井口要氏に相談して三澤さんの利用できる介助サービス組織を立ち上げ、新宿ライフケアセンターが発足した。自立ホームは日本初のケア付き住宅として全国に広がる可能性を持っていたが、地元八王子市での当事者の反対で、ケア付き住宅は二度とできなかつた。これによって国の施策も在宅はグループホーム方式ではなく介助サービス制度を普及させるという流れとなった。

交渉は、三澤さん、私、高橋修の三人で行うことが多かつた。私が理論的に相手を屈服させようとしてしゃべりまくつたあと、三澤さんが仲裁役に入り調停をして行政の譲歩を勝ち取るという方式を10年ほど続け、介助サービスの24時間制度や交通バリアフリー法、ケアマネジメントの当事者主体化や市町村障害者相談支援事業の自立生活センターへの受託制度などが変わっていった。

1991年の全国自立生活センター協議会の設立に向けては、専門家が作る自立生活問題研究会がきっかけとなり、全国10団体に三澤さんが代表する新宿ライフケアセンターも入り、全国自立生活センター協議会が設立された。

2003年、支援費制度の上限問題で厚労省障害6団体との交渉があつた。この時三澤さんが6団体の連携を取りまとめ、私が4時間への引き下げに一番影響を受ける自立生活センターの代表として厚労省交渉の障害者側まとめ役として活動した。6団体の結束は強く、厚労省も4時間の上限撤廃をすることになった。この間1ヶ月にわたり、厚労省を取り巻くデモを率いて1月の冷雨の中、動いてくれた三澤さんのバックアップが何よりの支えとなつた。

運動では強い求心力を持ち、行政や専門家にも信頼感を抱かれる誠実な性格を持っていた三澤さんであるが、私生活においては生涯給料を取らず、介助サービスも夜間のみ使い、日中のDPIの役員会にも、死のひと月前にも電車で一人で来るような清貧な生活をしてきた。もっと介助時間を増やして楽な生活をすればと勧めても、はにかんだような微笑みをして取り合わなかった。自身のことについては行政に要求がましいことは一切できない性格で、いつも他の障害者の為を考え、自分は最後でいいというお坊ちゃんの人の良さを示していた。DPIでも脳性マヒや頸損の若手を連れてよく食事や飲み屋に通っていた。よく面倒を見てやっているなどいつも感心して見守っていた。彼は上にも下にも平等に目を配れる優しい性格を持っていた。日身連や育成会、共作連などとも共闘しDPI日本会議を同列に並ぶ全国団体に押し上げていったのも彼の温厚な性格のなせる技であった。



S54 夏合宿
長野県佐久市

1979年、頸損連絡会。前列三澤さん(左)、中西さん



2009年、モンゴルにてゲル(パオ)の前で。左から江戸徹氏、三澤さん、中西さん

彼とともに行った海外旅行であるモンゴルのウランバートルで開催されたDPI北東アジア地域委員会にDPIアジア太平洋ブロック議長として参加した。極寒のモンゴルのパオの中で吞んだウォッカと羊のバーベキューは忘れがたい。三澤さんはここでも控えめで、寒い中で暖かいパオの中に入る順番をおとなしく待っていた。

三澤さんと一緒に運動をやってきて幸せであった。

ひとつの時代

障害者の生活保障を要求する
連絡会議（障害連）参与
太田修平

おしゃれでダンディーな方だった。三澤さんとの出会いは35年以上前だろうか。東京青い芝の会と頸損連絡会がケア付き住宅を東京都に要求し、その学習会でだったと思う。以来日米障害者自立生活セミナーの主催者として一緒にしたり、障害連で運動を共にした。

何年か前まで、障害連では「ヤングリーダーズキャンプ」という若手を育てることを目的にしたキャンプを、長野県や河口湖などまで行ってやったが、三澤さんは若手に負けじとリーダーシップを発揮された。障害者運動の長老たちといるよりか、そういう場の方が楽しそうだった。

大きな思い出のひとつに、所得保障確立運動があった。私は清瀬療護園自治会として参加したと思うが、東京青い芝の会の人たちを中心にしながらも、三澤さんや、今は亡き今岡さんなどが運動をリードし、障害基礎年金の確立にこぎつけることができた。さらに施設費用徴収反対運動もあり、旧厚生省の中で一夜を明かすという運動も共に行っていった。

障害連は今岡秀蔵さんが早い時期にこの世を去ってしまい、私と三澤さんで代表や事務局長を交代交代のような形で、しばらく行うようになっていった。

私はどちらかといえば「原理主義」的なところを持ち合わせ、多くの関係者とぶつかっていく場面が多かったように思う。しかし三澤さんは懐が大きいのか、他の団体や行政当局者など関係

者とのパイプをつくり上げ、正面衝突を避けていってくれた。そんな感じなので、実は障害連の役員会では、私と三澤さんは結構やり合うことも多かった。今となっては懐かしい。

三澤さんは、頸髄損傷という障害であったが、珍しく脳性マヒの仲間が多く、若い脳性マヒ者からも慕われていた。「障害の重い者の立場にたつ」というのが、三澤さんの感覚的なものからきたのであろうか。

昨年は三澤さんをはじめ多くの障害者運動のリーダーが他界された。障害者運動の危機的状況でもある。若手を一日でも早く育てバトンタッチしていかなければならない。それが残された者の責任であろう。

ご冥福を心からお祈りしたい。



1986（昭和61）年6月18日施設費用徴収反対東京都庁交渉。前左から太田さん、三澤さん

キャンプのボランティア を募集しています!!

☆最近いろいろな所で 重度の障害者が自立生活を行うと様々な取り組みを行っています。私たち障害連第2回ヤングリーダーズキャンプを企画し 多くの仲間との交流を持ちレクレーションなどを通じて、「自立生活」という問題を考えていきたいと思っています。われと思ふ方の参加をお待ちしています。

期日： 8/30(木)～9/1(土)

場所： 静岡県 修善寺 花野野荘

交通手段： リフトバス

* 8/30 午前10時 新宿駅西口集合

費用： ボランティアはなし

事前打ち合わせ： 8/22(水) 午後3時 東京都障害者福祉会館
(山手線 田町駅下車徒歩5分 TEL. 03-445-6321)

主催： 障害者の生活を要求する連絡会議(障連) (TEL. 03-261-0311 内線. 766)

連絡先： 障連、又は 清瀬康徳園 太田修平 (0424-93-3235 内線)
八王子自立ホーム 三沢了 (0426-65-9131)

障害を持つ者持たぬ道
合はせて50人くらいのカ
アです!!

申し込みは8/21日まで
TELにてお願いいたします。
詳しくは連絡先まで。

▲▶1984年障害連ヤングリーダーズキャンプ資料



1990年キャンプ。今岡秀蔵氏(左)、三澤さん(右から2人目)



1992年キャンプ。左から関根義雄氏、三澤さん、宮本泰輔氏

参加メンバー紹介資料

なまえ 三沢了
年令 41 (ヤングとはいえない)

どんなところで、どんな風に暮らしていますか。

八王子にある自立ホームというところ
でタイプライター、原稿を書いたり、
人と話したり、電話をかけるをしています。
(主に障害者の生活をめぐる問題に関して)。
今まで一番楽しかったことは？(一番じゃなくても結構です)
久しぶり(20年ぶり)で唐原あまの海
で泳いだこと(浮んだこと)

いま一番やりたいこと、なりたいものは？

- あえてスポーツ
- 高級マシンによる電動車イスのレース(ジムカーナ)

いま何かを立っていることはありますか。

- 優柔不惑な自分自身
- 何となく世紀末的ななげやりさを
おもしろく思うものか

このメンバー紹介の時に使います。書きたいところを記入のうえ、当日
忘れずに持参して下さい。

三澤さんとともに歩んだ1980年代

あいえるの会理事長
白石清春

1980年に私は運動の拠点を秋田から相模原に移す。1981年全国青い芝の会の総会の折、役員を下りて新たな運動の模索をしていく。その頃から東京青い芝の会の方々とつながりができて、全国所得保障確立連絡会(以下、所保連)の仲間の一員として運動を行なうようになった。同年に相模原市に脳性まひ者が地域で生きる会を結成し、1982年には脳性まひ者地域作業所くえびこを開所して、相模原市を中心とした地域に根付いた運動を展開するに至った。

1981年に東京青い芝の会や頸損連の10年間にわたる運動の結果、ケア付き住宅である八王子自立ホームが開所していく。三澤さんや東京青い芝の会の磯部さん、寺田さんたちの影響を受けて、神奈川県にもケア付き住宅を作っていこうと活動を行ない、1986年に相模原市にケア付き住宅シャロームを設置するに至った。同じ年に、所保連の運動の成果が実り、国民年金の中に障害基礎年金を創設していくことができ、実施に至った。

所保連の運動を引き継ぐ形で全国障害者自立生活確立連絡会(自立連)を結成していった。ちょうどそのころ施設入所者から費用を徴収する動きがあった。施設に入所していても地域で自立していても生活費はかかるので、差支えない程度の費用を施設入所者から徴収することはやぶさかではないというのが自立連の考え方であった。入所者の扶養義務者からも費用を徴収



1986年施設費用徴収反対6・30全共闘厚生省行動。白石さん

するといった厚生省の案に対し、「障害者は赤ん坊じゃない」というスローガンのもと運動を行なっていた結果、扶養義務者からの費用徴収はなくなり、入所者本人からの徴収のみとなった経緯がある。

三澤さんとは1980年代、所得保障や施設費用徴収問題の時に運動を共にしてきた。会議の際、集会や行動の折に三澤さんとは顔を合わせていたが、三澤さんはいつも微笑みながら温和な顔をして私に話しかけてきた。私はその当時、所保連や自立連の代表を務めていて、責任という重圧でだいぶ緊張していたが、三澤さんの温和な顔を見るたびに緊張がゆるんでとても癒されたことを覚えている。三澤さんにはそんな不思議な、みんなを暖かく包み込む力があったのである。

三澤さん、現世でのお仕事お疲れ様。



1986年施設費用徴収反対運動。左から三澤さん、白石さん



1986年、左から三澤さん(マイク)、白石さん



1986年施設費用徴収反対運動。中央に尾上浩二氏(マイク)、左に三澤さん、今岡秀蔵氏、太田修平氏

交通アクセス行動と三澤さん

DPI日本会議事務局長
尾上浩二

海外からの研修生相手の講義で、日本滞在の感想を聴くと「駅のエレベーター整備をはじめとしたバリアフリー整備が素晴らしい」という声が返ってくることが多い。その度に、そうしたエレベーターの多くは、ここ20年間くらいの間に設置されたものであり、DPIが呼びかけた交通アクセス行動抜きにはあり得なかったことを伝えるようにしている。毎年取り組まれてきた交通アクセス行動(誰もが使える交通機関を求める全国行動)は、全国各地のバリアフリー条例制定を促し、2000年には交通バリアフリー法を実現する大きな原動力となった。

交通アクセス行動が取り組まれるきっかけは、1988年に開催されたRI(リハビリテーション・インターナショナル)世界会議だった。新宿の京王プラザで開催された同会議には、各国から障害者運動のリーダーも詰めかけていた。ジュディ・ヒューマンやカッレ・キョンキョラ、アドルフ・ラツツカをはじめ、故人となったジャスティン・ダート、マイケル・ウィンターといったそうそうたる顔ぶれだった。当事者による国際連帯集会を独自に設定するとともに、新宿駅までのデモ行進と集団乗車、運輸省交渉といった行動を呼びかけた。三澤さんと私が説明役みたいな形になり、行動の趣旨や概要を説明しにいった。そうすると、ジュディが顔見知りの人達に呼びかけてくれ参加予定者はどんどん広がっていった。結局、国内外から200人以上の障害者が参加する行動となった。こうした行動は初めてだったので、シュプレヒコールも用意していなかった。デモが始まってから、慌ててジュディに「こういう時には何というのか?」とたずねたところ、「アクセス・ナウ!」と教えてくれた。それで、「アクセス・ナウ! 電車に乗せろ!」と、その後ずっと使われるスローガンが誕生したのだった。当時は、新宿駅をはじめとする主要駅にもエレベーター

は設置されていなかったの、集団乗車で駅は一時混乱状態になった。乗車に手間取り、大幅に遅れて、運輸省への到着となった。ある意味、当時のバリアフルな状況を象徴するできごとでもあった。

この行動のインパクトは大きく、その後、交通アクセス行動を毎年展開していくことにつながった。当初、中央1ヶ所での行動だった。当時、総評会館の7階に間借りしていた障害連の机スペースに、DPI日本会議は居候する形で電話回線を置かせてもら



1992年10月11-12日、第5回全国交通大行動

っていた。私は、行動の数日前から東京に入り電話かけ等をしていた。その頃、ホテルに泊まる余裕がなく、その度に、三澤さんの家に泊めてもらっていた。丸一日準備作業に追われた後、夜遅く三澤さんと食事をしながら色々としたのも、懐かしい思い出。

その後、統一行動日を設定し、全国の仲間呼びかけて各地で一斉に展開する活動となっていた。全国30ヶ所、のべ3000人が参加する文字通りの大行動になった。そうした行動とともに、DPIは国レベルでのバリア

フリー法と自治体条例の制定を運動方針として掲げた。また、DPI自体も「行動するDPIへ」と、各地の運動と結びついて発展していく過程でもあった。

私が当時活動していた大阪府では1992年に条例制定をみたが、その時の焦点の一つが、鉄道駅舎のエレベーター設置義務化だった。交通アクセス行動を地元でも展開してバリアフルな状況を明らかにするとともに、条例に盛り込ませるべく作戦を練った。その時に役に立ったのが、他の自治体等の情報だった。当時はインターネットなども普及しておらず、口コミが重要な情報源だった。三澤さんは自分の手元に集まった情報を労をいとわずに提供してくれた。おかげで、神奈川県建築基準条例改正や横浜市のエレベーター設置助成制度等、当時の最新の動きを入手することができた。これらの情報が、その後の交渉に大いに役立ち、鉄道駅舎のエレベーター設置を義務づけることができたのだった。

大阪、兵庫での制定を皮切りに、全国各地に条例が広がったこともあって、2000年に交通バリアフリー法が制定されることになった。実は、1990年代初頭の運輸省交渉の際に、回答に立った課長補佐から「日本でもADAのような法律が必要」と、それまでには無かった発言が飛び出したことがあった。だが、当時の法制局は「法律事項ではない」とし、「鉄道駅舎エレベーター設置法案」は幻に終わった。その後の各地での条例制定から交通バリアフリー法という展開は、そのリベンジといってもよかった。「法律事項ではない」と一蹴された状況を、私たち当事者の行動が大きく変えたことをしっかりと確認しておきたい。そして、その行動の中心には、いつも三澤さんがいたことも併せて伝えたい。



1993年10月18日、全国交通大行動。民鉄協交渉

「政策研究・提言活動」と三澤さん

DPI日本会議事務局次長
奥山幸博

第1回障害者政策研究全国集会は、1995年12月9日、総評会館(現連合会館)において開催されました。予想を上回る参加者があり、右往左往していたことが思い起こされます。1996年の第2回集会は「阪神・淡路大震災」後の神戸市で開催されました。東京以外の開催はこの回だけとなりました。集会は休みなく継続され、2011年の第17回まで行われました。資料集を読み返してみると、実行委員長は第1回から4回までが中西正司さん、5回から7回までが樋口恵子さん、8回から17回までを三澤さんが務められました。2012年からはDPI主催の政策討論集会として、実質的には従来からの取り組みが続けられています。およそ20年にわたって、三澤さんが「政策研究・提言活動」のリーダー的役割を果たしてきたことがわかります。

国際障害者年以降の運動のあり方について、多くの個人、団体が参加して熱い議論が繰り返行われました。「当事者による政策提言」といった方向性が確認され、それを担うための組織として、1993年にBEGIN(障害者総合情報ネットワーク)が設立されました。BEGINを事務局として政策研究集会の準備が進められ、第1回目はDPI、JIL、BEGIN、全国公的介護保障要求者組合が呼びかけ団体となって開催されました。BEGINは2004年にDPIと組織統合されましたが、集会実行委員会は12団体で構成されることとなり、実行委員長であった三澤さんが、調整、とりまとめという難しい役割を果たされました。

BEGIN及び実行委員会方式の集会という取り組みを、どう評価するかについては、これら



1997年12月7日、第3回障害者政策研究集会、懇親会。左から佐藤聡氏、李幸宏氏、高橋修氏、右端、三澤さん

を担った何人かの方々
が故人となった今、難しい面もあるかと思われ
ます。ただ、この間の障害者制度改革の中で1つの
キーワードでもあった「当事者参画」につながる、
大きな意味のある試みであったことは確かだろ
うと思います。三澤さんがエネルギーを注いで
きた「政策研究・提言活動」をより充実させてい
きたいものです。

2002年第6回DPI世界会議札幌大会の国際的意義

アジア・ディスアビリティ・インスティテュート
(Asia Disability Institute)代表
中西由起子

DPI世界会議札幌大会は、会場をぎっしり埋めた世界110ヶ国からののべ3,000人の参加者、40もの分科会、ホテルへの輸送のために全国から集まった100台以上ものリフト付きバン、3,000人以上のボランティアなど、DPIの歴史上最大の会議であった。混乱もないスケジュール通りのスムーズな運営体制は、海外からの参加者から「こんなに素晴らしい会議はみたことがない」と称賛を受けたほど完璧なものであった。これにより、DPI日本会議は国際的に有能な信頼に値する団体として確固たる地位を築いた。

1993-2002年のアジア太平洋障害者の十年最終年会議としての位置づけもあったが、国連で障害者の権利条約を策定しようという国内外の期待を集大成した会議であった。条約草案作成のプロセスに当事者の意見を反映させること、参加させることは、全体会や多くの分科会で要望された。この会議を支援するため国内のさまざまな障害種別の団体が結集したアジア太平洋障害者の十年最終年記念フォーラム組織委員会の設立により、国内的には、その後のJDF(日本障害フォーラム)誕生への道筋をつけて新時代の幕開けを飾った。

東にカナダのDPI事務局のモイラ・ジョンズ、西にイギリスの強力な世界評議員のレイチェル・ハーストを相手に、三澤さんはDPI世界会議の日本の事務局長として奮闘した。DPI日本会議は国際舞台での活躍が少ないであろうとの思い込みで、我々が指導しなければと張り切る女性2人の要求を辛抱強く聞き、完璧な準備を成し遂げた。それまでは単なる受け身の国際会議出席者であったのが、急にDPI日本会議事務局長として積極的に運営を担わねばならず、最初は大いに戸惑ったのではないだろうか。

DPI日本会議での議事で意見が割れると、必ず「まあ、まあ」と割って入り、妥協の方向を示してきた三澤さんの手腕が、舞台裏では次々と大会事務局に持ち込まれた雑多な問題解決に対していかに発揮された。会議参加者からの「よかった」や「ありがとう」の満足や感謝の言葉を受けるべきは、表舞台で参加者と意見を交わしていた我々ではなく、裏方の三澤さんである。



札幌大会にてモイラ・ジョンズ氏(左)と三澤さん

2002年第6回DPI世界会議札幌大会の国内的意義

DPI日本会議副議長
西村正樹

1992年11月、DPI日本会議が主催した「国連障害者の十年最終年記念キャンペーン」の一環として私たち北海道で活動する福祉関係者は、DPI世界会議事務局長のヘンリー・エンズ氏を招き講演会を札幌で開催しました。

この講演会においてエンズ氏が語ったDPI運動の歴史と理念に私たちは大きな衝撃を受けました。エンズ氏は、「DPI運動は、専門家により人生や生き方のすべてを決められてきた障害者の抵抗運動である。DPIは、障害者自身の声(われら自身の声)に基づき行動し、自らの人生を生きていくための運動を進めてきた。その理念の一つとしては、障害者自身が主体的な役割を果たすこと。二つ目は、障害の種別を超えること。そして三つ目は、障害者の課題を、障害者の人権と尊厳の問題とすること。そして、障害者の抱える問題の改善は、すべての人々の基本的問題の改善につながるものであり、DPIは、すべての人は等しく価値ある存在であり、すべての人々が尊重される社会の実現を目標としている」との話でした。講演会終了後の交流会の席上での「ニシムラ。いつか札幌でDPI世界会議を開催しないか」とのエンズ氏の問いかけに、私は、その場で札幌誘致を約束しました。

1998年12月に開催された第5回DPI世界会議メキシコ大会における札幌開催の決定を受けて、私たちは、「大会までに何をつくり、大会後に何を残すか」を命題として開催準備を進めてきました。そして、2002年10月に開催した札幌大会最終日に提起した札幌宣言では、国連における「障害者権利条約」と各国における「障害者差別禁止法」の制定をDPI運動の目標として確認しました。

その翌年から、「Nothing about us, without us!(私たち障害者のことは、私たち障害者抜きに決めてはならない)」とのスローガンのもとDPIをはじめとする世界の障害当事者団体の参画により国連で議論が始まりました。そして、「障害者権利条約」が2006年12月に採択されました。日本では、2013年6月に「障害者差別解消法」が成立しました。

この間のDPI日本会議の運動は、三澤さんのリーダーシップのもと、障害者団体の枠組みを超え、国境を越え、様々な違いを超えて着実に進めてきました。そして、第6回DPI世界会議札幌大会の誘致と準備と開催は、国内の障害者運動が結集する大きなきっかけであり、DPI日本会議の運動の強化と国内外における新たな障害当事者運動のスタートに寄与したといえます。

※元、第6回DPI世界会議札幌大会組織委員会事務局長

三澤さんの一言 ～2004年10・20大行動～

メインストリーム協会事務局長
佐藤 聡

2004年10月20日。その日は朝から大粒の雨が降り続いていた。東京タワーが目の前にそびえる芝公園は、カッパを着た車イスの人たちで溢れていた。

厚労省は介護保険と障害福祉サービスの統合を目指し、前年から様々な動きを見せていた。DPI日本会議やJIL等の全国の6つの障害者団体が「障害者の地域生活確立の実現を求める全国大行動実行委員会」を結成し、この年の6月から統合を阻止するために運動を展開していた。7月の参議院選挙後の政治情勢の変化で、10月に急遽「改革のグランドデザイン」が厚労省から発表された。限りなく介護保険の仕組みに似せたこの改革案は、統合へ向けた確実なステップであり、私たちは介護保険統合に反対する集会とデモ行進を企画していた。

この年は秋になっても台風が続々と発生する台風の当たり年で、10月も半ばを過ぎたにもかかわらず、大型の台風が発生していた。まさかデモの日に台風が直撃しやしないかと、私は連日天気予報を繰り返しチェックしていた。しかし、台風は勢力を落とさずにデモの日に東京に向かっていった。

困った。これはかなりまずい状況だ。もし、台風の中でデモを決行したら、大きな事故が起きてしまうのではないか。何か飛んできて誰かに当たって死んでしまった、なんてことが起きかねない。主催者としてはそんな事態は絶対に避けなければならない。

しかし、一方で統合問題も絶対に許すわけにはいかない。デモを中止し、統合が進展してしまったら、重度障害者の地域生活は崩壊してしまう。何十年にもわたって全国の障害者たちが血のにじむ努力で実践してきた自立生活運動を止めることは出来ない。この2つの想いが私たちの中で揺れ動いていた。

10月19日。ついにデモの前日になった。決行するのか、中止するのか。事務局メンバーが集まり、ホワイトボードに書かれた気象予報図を見つめていた。どこからどうみても、台風が明日東京を直撃するのは確実だ。デモ申請をした警察署から電話があり「明日デモ申請をしている団体は他にもいくつかありましたが、みんな中止になりましたよ。おたくさんも中止ですよ？ まさかやるなんてことはないでしょうね?」。会議室は重苦しい空気に包まれ、沈黙が続いていた。

その時、三澤さんが口を開いた。「明日は予定通りやろう！すでに東京に入っている地方の人もある。介護保険との統合を許すわけにはいかない。何か事故が起きたら全責任を私がつとる。みなさんは心配せずにやってください」と言ったのだ。その言葉を聞いて、私はすーっと気が楽になった。やっぱりやりたい。台風になんかに負けてたまるか。全国の仲間はみんなその思いで集まってきているんだから、絶対にやってやるぞ。

デモ当日は朝から激しい風と豪雨。公園は水たまりを通り越して池のようになっていた。トラメガとマイクはビニールくるんでセッティングしていく。スタッフも参加者もみんな完全防水の服装でやって来たのだが、すぐにカッパの下はずぶ濡れになった。雨が激しすぎて、首回りや袖口から水が入ってしまうのだ。携帯電話は壊れるし、電動車イスも続々と止まっていく。寒さで唇が紫になり、震えが止まらない。しかし、参加者は2,000人を超え、途中で抜ける人は誰もいなかった。道路を歩いている通行人は一人もいない孤独なデモだったが、参加者全員に気合いがみなぎり、集会とデモは無事にやり遂げることが出来た。

夕方には新幹線が止まり、地方からの参加者は帰れない人が続出した。急遽、Oさんが代々のオリンピックセンターの宿泊を数百人分確保してくれた。オリンピックセンターも台風でキャンセルが続出し、そのおかげで部屋が確保できたのだ。後片付けが終わり、プールに飛び込んだのかというくらい全身びしょ濡れで、震えながらオリンピックセンターに向かった。まずは暖まらないと死んでしまうわ、とお風呂に向かうと、果てしなく並ぶ車イスの列。絶望的な気持ちにな



なったけど、みんな頑張ったな〜と嬉しくなった。

今でもあの台風のデモのことはよく話題に上がる。「あのデモに参加していました!」と聞くと、メチャメチャ良い人だなと思ってしまう。三澤さんの一言がなかったら、あのデモはやらなかったと思う。あのデモを経験した後は、何も怖くなくなった。どんなに追い込まれても、私たちは団結して立ち向かえるんだ、という自信を持つことができた。運動の面白さを、三澤さんに教えてもらったと思う。



三澤さんの呼びかけで発足した「東北関東大震災障害者救援本部」

自立生活センター STEP えどがわ
今村 登

崔栄繁さん(DPI日本会議事務局員)から電話があったのは、震災の翌日だった。震災発生時、江戸川区の事務所に居た僕は、自宅マンションのエレベーターが停止し、復旧の見通しが立たず、同様の仲間たちと一緒に事務所で夜を明かすことを余儀なくされた。余震に警戒しつつ、テレビやインターネットから津波被害や原発の情報に神経をとがらせ、利用者さんと従業員の安否確認が、まだ全員分が終わらないことにも気を揉みながら朝を迎えた時に、僕の携帯に崔さんから電話がかかってきた。「この震災で被災した障害者の支援をする組織を立ち上げると三澤さんが言っている。一緒にやってくれ」とのことだった。

3.11は金曜日だった。土日で呼びかけと会場手配をし、3日後の3月14日に参議院会館の会議室に集合したメンバーは、東京のみならず、愛知や大阪からも駆けつけてくれた。こうして、DPI、JIL、ゆめ風基金、インクルネット、共同連が中心となって「東北関東大震災障害者救援本部」が設立された。まだこの震災が「東日本大震災」と命名される前のことだった。

三澤さんは、前年の秋に胃の全摘手術をされ約半年の療養生活から復帰した初日が、この震災の日だったという。この日の午前中に、前年から始まった障害者制度改革の最初の取り組みだった障害者基本法の抜本改正案が国会に上程されることが閣議決定され、それを受けて午後からJDF代表者会・議幹事会が虎ノ門にある全社協ビルで開かれることになっており、三澤さんはそこに出席するために会場に向かっていた最中だった。何とか無事に会場にたどり着いたものの、全館エレベーターが停止しており、JDFの会議も中止となり、仕方なく車で自宅に向かうことにしたが、前代未聞の大渋滞に見舞われ、17時ころ虎ノ門を出発し、新宿区落合にある自宅に到着したのは、8時間後の深夜1時過ぎだった。この長い道中に三澤さんが救援組織を立ち上げると決めて、崔さんに人を集めるよう指示を出されたのだという。

復帰初日があの震災でまだ体調も本調子には程遠い状況だったと思うし、実際、発声も苦しそうであったが、議員会館に集まったメンバーの前で、救援本部を立ち上げると宣言した三澤さんの表情は、心なしか生き活きしていたように見えたのは僕だけではなかっただろう。この会議で救援本部長に就任された中西さんが、数日後ある新聞記者からの「皆さんは、ただでさえご自分の生活のことだけでも大変なご苦勞をなさっていると思いますが、よく他人の支援までされますね」との問いかけにこう答えていた。「みんな普段の生活の大変さを知っているから、被災障害者の大変さを容易に想像できる。想いを馳せることができる。だから動けるのだ」。

真っ先に救援組織の立ち上げを呼びかけた三澤さんの思いは、きっとこの中西さんの言葉に集約されていたと思う。

障害者権利条約と三澤さん

DPI日本会議事務局
崔 栄繁



2003年10月、世界会議一周年イベントにて、挨拶する三澤さん

2014年1月20日、日本は世界で141番目の障害者権利条約の批准国となった。三澤さんはそれを見ずに逝かれてしまった。間に合わなかった。

1999年にDPIに関わりだした私は、その直後から当時DPI日本会議の事務局長をされていた三澤さんの泊り介助にも入るようになった(泊り介助は結局その後6～7年させてもらった)。時は2002年10月の開催にむけてDPI世界会議札幌大会(以下、2002世界会議)の準備の真っ最中。事務局員兼介助者ということで、三澤さんとは国内外そこから中にご一緒する機会を持たせていただいた。泊りの出張で行けば、会食や飲み会の後の二次会会場が三澤さんのホテルの部屋になってしまうこともしばしばだった。

三澤さんというと、まちづくりや交通アクセス運動、所得保障分野でのご活躍のイメージがあるが、障害者権利条約(以下、権利条約)に非常に関心があった方である。自立生活運動、交通アクセス運動、そしてDPIでの役職と海外の情報に接する機会が多く、国際的な動きに敏感でいらした。権利条約については、権利条約制定の大会アピールを出すこととなった2002世界会議の準備がきっかけではなかったかと思う。ちなみに2002世界会議については、三澤さんは組織委員会事務総長という一番大変で面倒な役についており、大きな事から小さな事まで何もかもやらされていた。

2002年7～8月、権利条約策定のための検討を行うため、ニューヨークの国連本部で第1回目となる記念すべき障害者権利条約特別委員会(以下、特別委員会)が2週間の会期で開催された。この時、のちのJDF(日本障害フォーラム)となる「アジア太平洋障害者の十年最終年記念フォーラム」のメンバーによる傍聴団がつけられた。三澤さんは第2週目の傍聴団に参加した。10

月の世界会議の直前であり、事務総長という一番多忙な役職にいたにもかかわらず、世界会議の宣伝も含め「行こう!」ということになったのである。私も介助者の役割も含め同行したのだが、世界会議の直前なのに一週間も大丈夫か? と内心想っていた。

しかし振り返ってみると、この第1回特別委員会は、権利条約策定交渉の開始を決議し、その後の権利条約策定や批准への大きなうねりを作り出す出発点となったのである。そのうねりの中で、東俊裕さんを第3回特別委員会から日本政府代表団の顧問に送ったり、JDF条約委員会の事務局団体になったり、障害者制度改革だったり、権利条約制定・批准・国内実施への活動が、その後のDPI日本会議の運動の核となってきたことをかんがみると、この三澤さんの傍聴活動はのちの運動への先見の明であった。また当時スウェーデンの社会大臣で障害当事者のベクト・リンクビストさんなど、世界の著名な障害者にも会えることができた。この時の傍聴には、日本身体障害者団体連合会会長の兒玉さんなどと同行させていただいたが、特に日本障害者リハビリテーション協会の松井亮輔さんには通訳や委員会後の他の国のNGOの方々との交流など、大変お世話になった(写真)。

その後、2006年の第8回特別委員会まで延べ200名のNGO代表団をJDFで組織し、傍聴活動やロビー活動を行った。そして権利条約に関する政府とJDFの意見交換会を20回、開催してきた。その事務局団体をDPI日本会議が担ってきた。2009年から権利条約批准のための障害者制度改革にもDPI日本会議は大きな役割を果たしてきた。これは、三澤さんが他の仲間の方々と共に作り上げてきた道である。

2013年6月の障害者差別解消法成立を三澤さんと一緒に国会傍聴できたのは大変貴重な思い出だ。

条約の精神を実現することは三澤さんの遺志である。批准をした今、障害者制度改革は第2ラウンドに入った。三澤さん、どうぞ仲間や後輩の活動を見守ってください。



2002年第1回特別委員会の傍聴団。故日身連会長の兒玉さん、日盲連会長の笹川さん、リハ協の松井さん、JD副代表の吉本さん、三澤さんと崔。国連本部ビルの前で[肩書きは当時]

三澤さん最後の講義「交通アクセスの歴史」

DPI日本会議 交通バリアフリー担当
伊藤秀樹

交通アクセスに関する運動はDPI結成当初からのメインテーマであり、障害当事者運動の歴史の中でも常に向き合ってきた取り組みの一つです。そして、行政・社会・日本を変え、世界にも影響を与えて来ました。

こうした運動に尽力されてきた三澤さんの講義となったのが、2013年度バリアフリー障害当事者リーダー養成研修での「交通アクセスの運動の歴史」です。その講義で印象に残った言葉を紹介します。

「**全ての人**がバリアを感じなくてすむ社会を私たちは求めて行きたい」。：社会の排除と無関心、そして差別や偏見との戦いから、「街づくり」「建物や道路などの整備」「交通機関」など、何が問題なのかということに、一つ一つ細かく意見してきたことから障害当事者の運動が始まった。「そんなことをして何になるんだ」という批判もある中、何かが変わったことは確かであり、そのような運動は全国の障害当事者に勇気を与えた。

「**法整備や基本方針の検討における障害当事者参画の意義**」：行政が法律や方針を検討する場に、必ず障害当事者を入れるよう要望してきた。そして、2006年に出来たバリアフリー新法の中では、当事者の役割というものがあるが謳われた。しかし、当初「こんな法律、どうしようもないんじゃないか」という声もあったが、だからと言って切り捨ててしまえば、この法律を作ることにかけてきた当事者運動の流れ自体を否定し、衰退してしまう。新たに作られた法律により、変えていく基盤ができたということである。

他にもたくさん大切なお話をいただきましたが、この研修で最後に三澤さんが話した内容が以下です。「若い皆さんがこの研修の中で運動の経過を学び、それぞれの地域で当事者としての役割を果たしていく。そういう運動を今後とも強めていって欲しいと思います」。：“三澤さんの優しい声”というよりは、“残された体力から絞り出された声”であり、その声の中にも運動の理念の力強さを感じ、また、謙虚さを見せながらも誇らしげに語る三澤さんが印象的でした。

制度改革に向けた動きが活発になり、ここぞという時に三澤さんは病に倒られたわけですが、それでも当事者の育成については率先して取り組まれました。2013年度に行われた「エンパワメントスクール」は三澤さんからの提案であり、全国から集まった20名以上の次世代を担うべき当事者に、障害当事者運動の意義を遺志として心に刻むことのできた事業だと思っています。



1992年、DPIアジア太平洋ブロック会議で中国、北京へ



1998年、交通アクセス東京行動で営団乗り込み



2000年代初め頃、交通アクセス東京行動



2013年9月4日、バリアフリー障害当事者リーダー研修。三澤さん最後の講義

DPI日本会議の足跡 (事務局こぼれ話)

三澤了

私の障害者運動との関わりで、後半の20年近くはDPI日本会議(以下DPI)であることから、DPIの歴史を伝えることは私が行うべき仕事の1つであろうと考え、知っている範囲で書いてみることにした。ただし、これはDPIの正史ではなく、こぼれ話と言った趣のものである。

DPI日本会議結成前夜

障害者による障害者のための国際的ネットワークDPIは、1981年にシンガポールで誕生した。この結成集会には世界中から障害者たちが数多く集まり、熱い論議が交わされたようである。私自身は参加していないが、記録フィルムでは日本からの80人ほどの参加者と、議長団の八代英太さん、岡由起子さん(現・中西由起子さん)、樋口恵子さん、今岡秀蔵さんらが並び、一定のリーダーシップを取っていたことが報告されている。

日本では、1970年代の初め頃から、青い芝の会(結成は50年代)等の重度障害者の団体や、障害種別を問わない団体などが活発に動



1981年のシンガポールでのDPI設立総会で八代英太氏(左)と岡(現・中西)由起子氏



1988年、樋口恵子氏



1977年、障害連、宮尾修氏(左)、一人置いて今岡秀蔵氏

き始め、また1981年の「国際障害者年」を機に障害者の差別偏見の撤廃、生活保障の充実、生活環境の改善等に取り組む障害者団体の動きが全国にみられた。

こうした活動家たちがDPIの国内組織立ち上げの話し合いを始めた。日時は定かではないが、1982～1983年のある日、全国障害者解放運動連絡会議(以下、全障連)から当時の代表幹事の楠敏雄さんや事務局長の矢内健二さん、障害者の生活保障を要求する連絡会議(以下、障害連)から当時の議長の宮尾修さん、事務局長の今岡秀蔵さんと私、そして視覚障害者労働問題協議会(以下、視労協)からは堀利和さんと込山満広さんが集まって、話し合いを行った。そこでは新しい組織に懐疑的な意見もでたが、最終的には三団体が協力して組織化に臨み、事務局は障害連が担うこと等が確認された。

私は準備会には直接参加していないが、多様な人達が集まり、1986年に正式結成された

結成当初のDPIには、傍目にも新しい息吹みたいなものが感じられた。1988年頃に障害連の太田修平さんがDPIの事務局長になり、私にとってDPIが身近になっていった。

90年代の事務局体制

90年代の事務局には専従の職員はおらず、間借りしていた障害連やスタジオI(アイ)生活支援ネットワークの職員の手を借りて、2ヶ月に一度の全体の会議や、各地の団体等との連絡調整にあたっていた。1990年にアメリカでADA法が制定された時には、その日本語訳を発行する作業に取り組み、障害者の権利の確立、差別・偏見の糾弾ということには特に力をいれていた。ADAの翻訳は、設立当時から今まで事務局の仕事や通訳など様々な形で関わってくれる齋藤明子さんや東京青い芝の会の寺田純一さん、船橋の杉井邦男さん等が行った。この時期のDPIは、主に太田修平さんが、障害連のアルバイト職員だった西川正さんの手を借りて行っていた。事務局会議には、全障連の八柳卓史さんや寺田純一さん、齋藤明子さん、若くして亡くなった立川の高橋修さん、そして個人会員の勝又裕司さん等が集まっていた。樋



1977年、寺田純一氏(左)、近藤秀夫氏(右)



1992年10月11日、第5回全国交通大行動。左から関根さん、八柳卓史氏、太田さん、高橋修氏

口恵子さんや近藤秀夫さんも、事務局的な活動を行っていた。大学生の時に太田修平さんや私の介助をやっていた宮本泰輔さんは、1990年頃に障害連のアルバイトとして事務所に出入りし始め、その後DPIの専従職員として20年近くDPIの基盤づくりに貢献した。

1993年に私が障害連選出の常任委員となり、DPIの事務局長を太田さんから引き継いだ。この時期はもっぱら組織構成の話をしてきた。特に、日本身体障害者団体連合会(日身連)を始めとする既存の大きな団体との関係をどうするのかということと、当事者団体の集合体として活動するのかそれとも個人の集まりとして新たな運動を目指すのか、といった二つの問題は、設立当初から整理されないままになっていた。日身連とのことでは、八代英太さんが1993年に中国・北京で行われたDPIアジア・太平洋ブロック総会に日身連の副会長数人をお連れし、DPIメンバーとの融合をはかろうとしたこともあった。また八代さんは、常任委員会をDPIと日身連から半数ずつ選出して構成し、

代表は日身連から出す案を提案した。DPIでは、日身連の誰かがDPI常任委員に立候補するのなら検討の余地もあるが、半数ずつ委員を選出するというのは受け入れられないということになり、この案は立ち消えとなった。その後、八代さんも日身連との合併をあきらめ、組織に関する論議は一段落した。

また組織の形態については、DPI全体を全国団体協議会、地方団体協議会、個人協議会の三協議会で構成することとなった。現在は、常任委員会で審査・承認された障害者団体を正会員とし、それ以外はDPIの活動を支える賛助会員およびDPIの機関紙の購読会員の二つとしている。正会員を団体会員のみにするしたのは、DPIがNPO法人取得に際して行った規定整理の一環である。

脱施設・自立生活運動と 交通アクセスの取り組み

80年代初頭に、自立生活運動の創始者であるエド・ロバーツさん、ジュディ・ヒューマンさんやマイケル・ウィンターさん、当時ハワイの自立生活センターで仕事をしていた高嶺豊さんなどアメリカの障害者運動のリーダーたちが次々



1987年、第2回DPI日本会議集会。左から白石清春氏、エド・ロバーツ氏、一人置いて中西由起子氏



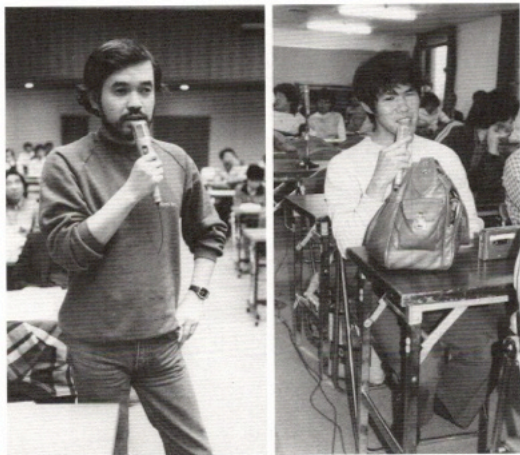
1987年、第2回DPI日本会議集会。高嶺豊氏(中央)、寺田純一氏(右)

と来日し、障害者運動の役割の大切さや自立生活運動をアピールしていた。また、81年から開始されたダスキンリーダー育成海外派遣事業研修を終えて帰ってきた人たちによってアメリカの自立生活運動の報告がなされ、1986年に日本で初めての自立生活センターとして東京・八王子にヒューマンケア協会が開設されたことは、脱施設・地域で自立生活の実現を目指していたDPIの活動に大きな影響を及ぼし、自立生活を可能とする条件整備が一つの課題となった。

DPIにとってもう一つの重要な課題は、交通アクセスの確立であった。1970年初頭から車いすで道路や建物を自由に使えるようにするための動きが起こりはじめ、80年代には、全国の都市で鉄道駅舎の改善に対する要求などが目立つようになっていた。こうした動きが一つにまとまるきっかけは、1988年のリハビリテーションインターナショナル(RI)世界大会を機に取られた行動である。DPIは、この大会を障害者の発言力を高める機会ならびに各国の障害者の出会いの場とすることを目的に「RIを機に行動する障害者委員会」を立ち上げた。近藤

秀夫さんらが中心となって、カンパを呼び掛け、大会中は会場の京王プラザホテルのスイートルームを5日間借り切り、そこに飲み物と軽食を用意して、国内外の参加者が出入りする交流と情報交換の場とした。

そして海外からの参加者を含む総勢200人が交通アクセスを求めるデモ行進をし、さらに新宿から電車に乗って新橋まで移動、運輸省(現・国土交通省)に要請に行くことを企画、実行した。これで新宿駅は大混乱となり、電車の乗り込みにも時間がかかって、約50人が運輸省についたときは、約束の時間から大幅に遅れていた。案の定、運輸省の対応は木で鼻をくったようなもので、怒鳴り合いに近い状態で交渉は終えた。後日、当時参議院議員であった堀利和さんが仲介に入り、当時のDPI議長の高嶺豊さんと運輸省の課長補佐の間で手打ちの機会が設けられた。この行動は、90年以降「誰もが使える交通機関を求める全国大行動」となり、現在に引き継がれている。



1984年、第2回障害者と労働者の全国連帯集会。奥山幸博氏(左)、上蘭和隆氏(右)



1977年、二日市安氏



1991年頃、鎌田真和氏

障害者総合情報ネットワークとDPI権利擁護センター

1993年、DPIと共に歩む組織として、障害者関連の法制度や行政施策に関する情報を提供することを目的とした「障害者総合情報ネットワーク」(以下、総合情報ネットワーク)が立ち上がり、二日市安さんが代表に就いた。実質的には大阪・兵庫を中心に活動していた大賀重太郎さんが取り仕切り、事務局には、奥山幸博さん、矢内健二さん、池上智子さん、上蘭和隆さん、鎌田真和さんと私が名を連ねた。また、尾上浩二さんは機関誌「ジョイフルビギン」の編集長として大阪で編集に携わっていた。その後1998年にメキシコシティで開かれた第5回DPI世界会議に、一参加者の介助者でできていた現DPI事務局員の崔榮繁さんがアルバイトで入った。

この時期、心身障害者対策基本法が改正されることとなり、DPIや情報ネットワークが深く関わっていた「国連障害者の十年最終年実行委

さん、池上智子さんと私で、研究集会の実行委員会を結成した。これがその後「障害者政策研究集会(以下、政策研)」となる。DPI、JIL、差別と闘う共同体連合、全国公的介護保障要求者組合の4団体の呼びかけで第1回の研究集会が1995年に東京・御茶ノ水の総評会館にて開催された(その後、公的介護保障協議会、障害児を普通学校へ全国連絡会、精神障害者サポートネットワーク、全国「精神病」者集団、ピープルファースト、全国青い芝の会、自治労障害労働者連絡会、市民が作る政策調査会等が参加した)。当初200人程の参加を見込んでいたが、実際には400人以上が全国から集まり、てんやわんやの大騒ぎとなったことを記憶している。第2回は1995年1月17日に大震災に見舞われた兵庫で同年の12月に開催、以降、毎年12月に東京で開催してきた。この政策研を通して、権利法制・障害者差別禁止法試案、労働法制、交通アクセス政策、インクルーシブ教育の原則と方法等、多くの課題で当事者主体の基本方針が打ち出され、それらの多くはDPIの運動方針の基本となっていった。

第6回世界会議札幌大会の開催

2002年はDPIにとって2つの点で大きな意味を持つ年であった。1つは障害者権利条約策定のための審議が国連で本格的に開始されたこと、もう一つは、第6回DPI世界会議を札幌で開催したことである。世界会議開催によってDPI日本会議は生まれ変わったといっても過言ではない。

この世界会議の構想は、現副議長の西村正



西村正樹氏(20代頃)

樹さんがDPIの創設者の1人であるカナダのヘンリー・エンズさんと札幌で出会い、世界会議開催を約束したことから始まった。西村さんは精力的に北海道内の障害者団体、労働組合、そして道や市にも働きかけた。第6回の開催地が決まる第5回メキシコ大会には、北海道から多数の参加者を送り込み、世界会議開催に対する強い意志をアピール、4年後の札幌開催が決定した。この決定は、北海道の障害者団体の人たちを大いに盛り上げたが、「DPI事務局はどう進めようとしているのか」と問い詰められた私はしどろもどろの回答しかできず、初めて「大変なことになった」という思いを強くした。それまでのDPIは年間予算5百万円程度で動いていた小さい組織である。3億円くらいかかる世界会議の実施はとても無謀と思えたが、西村さんの情熱と、当時DPI議長だった山田昭義さんの「やると受けちまった以上、やらならんが」という胆の座った一言で、とにかく動き

始めた。

まずは障害者一人ひとりにとってDPIは有益な団体なのだと全国の障害者たちに認識してもらい、さらに2002年の札幌大会にはみんなで集まろうという宣伝活動を全国的に展開、西日本の活動を引き受けた尾上さんは半年間に60か所以上で講演をした。同時に、開催資金の用途を立てることも重要な課題であった。国の支援を求めて厚生省(当時)や外務省に出かけたが、DPIが一団体でやることに国は支援できない、とあっさり断られて途方に暮れ、また日身連や日本盲人会連合(日盲連)など日頃お付き合いのなかった団体へも協力要請をしたが、まともに相手にされず屈辱的な思いもした。それでも全国団体の協力がなければ国や北海道や札幌市が動かないということで、日身連や日本障害者協議会(JD)や全日本手をつなぐ育成会(育成会)、リハビリテーション協会(リハ協)などが参加していた「アジア太平洋障害者の10年」推進キャンペーン(RNN)との関わりを求め、RNNのキャンペーン会議に毎年参加し、国内の諸団体との面識を深めていった。

2000年になって、RNNも2002年に日本で国際会議を開かざるを得ない状況になっていたことから、リハ協がRNNの最終年イベントとDPI世界会議をまとめて行うという提案をしてきた。そこで、再度RNNの国内メンバーに世界会議開催の協力要請をした結果、日本で開催する2002年の「アジア・太平洋障害者の10年」最終年フォーラムの第一部を札幌で行うDPI世界会議とし、第二部をRNNの最終年事業として大阪で行う、ということが決まった。

DPI世界会議の冠に「アジア・太平洋障害者の10年最終年フォーラム」とつくことには釈然としないものがあったが、それ以上を求めることはできなかった。

開催準備と開催の現場

2001年には、札幌と東京にそれぞれ事務局を設けた。世界会議開催組織委員会の下に置かれた札幌事務局は、神田直也さん(札幌身体障害者福祉協会会長)が代表、西村正樹さんが事務局長に就いて、専ら国内外の参加者を受け入れるためのアクセスの整備や宿泊設備の調査などを精力的に行った。東京事務局では、主に海外へのニュースの発信、プログラムの準備、国内外の参加者の募集と受け入れ態勢の整備など慣れない仕事にてんてこ舞いの日々が続いた。特に、電動車いす使用者の航空機利用については、各地の空港から札幌を目指す人の対応に齟齬がないよう、国土交通省の仲介のもとで航空会社の協会(定期航空協会)と話し合いを重ね、羽田、成田、新千歳の各空港では、電動車いす対応の研修も行った。その間にも開催資金の協力をお願いを続けていた。

2002年4月からは東京の宮本さんが札幌の西村事務局長の補佐に異動した。札幌事務局のまとまりを強くし仕事のスピードアップを図ったことなど、宮本さんの功績は大きい。東京事務局では南館こずえさんと内海句子さんが開催準備に携わることとなった。世界各地のDPI役員との連絡調整は特に骨の折れる仕事で、当時の世界議長だったジンバブエのジョシユア・マリंगाさんには電話が一回でつながることは



1987年11月、国連・障害者の十年(1983-1992)中間年。レイチェル・ハースト氏(左)、齋藤明子氏

めったになかった。カナダの世界会議事務局や英国のレイチェル・ハーストさんからは、こちらの仕事が終わった頃に電話がかかってきて、その対応に追われて帰宅が夜半になることも度々であった。

ある時もカナダ事務局からの電話で終電を逃してしまい、仕方がなくお茶の水から戸山町の自宅まで歩いて帰ることにした。あいにくその夜は大雨、途中で電動車いすのコントローラーボックスに雨水が入って止まってしまった。夜中の1時半を過ぎていたが、親切な人が「近くの警察署まで押して行く」と、正に地獄に仏のような手助けを申し出てくれた。警察署も親切で、荷物搬送用のトラック(何とリフトがついていた)で、家まで送り届けてくれた。こんなことがいくらでもあった2002年であった。

目まぐるしい準備を続けてきた世界会議は、110ヶ国から3,000人以上が参加し2002年10月15日から18日の4日間盛況のうちに開催され

た。世界中の障害者リーダーたち、そして日本全国から多くの仲間たちが参加した。国や北海道、札幌市からの支援もありがたかったが、数知れぬ個人や団体が支援の輪を広げてくださったことは今でもDPIの財産となっている。

この成功で、「DPI日本会議」は国内の障害者団体や関係省庁にも広く知られることとなり、発言力も大会前とは比較にならないほど大きくなった。2003年1月に勃発した厚労省による支援費の上限問題に関する抗議行動には、DPIの呼びかけに応じて、日身連、育成会、JD、日盲連等の団体が共同行動をとり、1ヶ月近く厚労省の前に座り込むという闘いを続けた。それ以来、これらの団体がまとまって厚労省と福祉サービスの在り方に関する協議を続けたり、国連の障害者権利条約の策定作業にNGOとして参加したり日本の障害者団体の大きなまとまりとなって、2004年の「日本障害フォーラム(JDF)」に繋がれていくこととなった。

・ ・ ・ ・ ・

2004年以降のDPIの動きは、多くの人を知るところであり、その動きを記すことは私の役割ではない。DPIの運動はとどまることなく続いている。私は、それをゆっくり見守っていくこととしよう。

(※『DPI日本会議われら自身の声』2012年Vol.28-1~2013年vol.29-1(不定期連載)を転載。原稿要約、編集：内海旬子)

障害者運動と次世代への期待

三澤了

私は20歳になった年の1月1日に車がぶつかって障害者になりました。当時は頸髄損傷という障害、それも私のような人たちはほとんど病院にいるか、あるいは家族がいれば家族のもとでほとんど寝たきりの生活をするというのがごくごく当たり前の姿でした。私も1年間病院生活をし、その後、東京の自宅で計6年間くらいいわゆる孤立無援という状態でした。やっぱりこのままの状態は悔しいし、なんとかならないかとか、いい加減もうこの生活に飽きちゃって、ちょっと街に出たいなと思い始めました。そして、他の頸髄損傷の人ってどんな生活をしているのだろう？ という思いにいたりしました。

今と違って当時の障害者センターは非常にルーズな所で、「うちのセンターを経過した頸損の人はこういう人ですよ」と、30人位の名簿を渡してくれたのです。それで、その30人くらいの人に手紙を書いて、「みんなどんな生活をしているか教えてくださいませんか。話し合いませんか」という手紙を書きました。山田昭義さんも中西正司さんもその中の1人として入っていたのですが、みんな同じような思いを持ったり悩みを持ったりしているということが分かりました。「自分たちが一番欲しいものは何か」をみんなで話をしようよということで、とりあえずは「外へ出たい」「街へ出たい」「店へ入りたい」、そういう思いがあがって、それをできるようにしようということで、街を歩いたり、すでに点検活動なんかをやっていた人がいたので、その人に引っ張ら

れてそういう仲間の活動をやらせてもらっていました。

そしてそのうちに電動車いすというものが外国では障害者が使って動いているようだというようなことを雑誌の記事で読んで、じゃあ日本でもこういう電動車いすというものを手に入れようじゃないか、というようなことを仲間と話し合いました。当時、山田さんが中心となっていたのですが、朝日新聞の厚生文化事業団というところが電動車いすをヨーロッパ・アメリカから30台買ってきてモニターをさせてくれると言ったので、そのモニターをやらせてもらって外を歩き始めたというのが最初の頃です。

周りを見ても、重度の頸髄損傷というような人間がひとりで生きていく、自分の生き方を自分で決めて生きていく、そういうことができるための条件はほとんどそろっていない、何にもない状況でした。だから、何でもいから「あれをしたい」「これをしたい」ということを仲間とみんなで語り合って、私の場合は東京の新宿区に住んでいたのも、とりあえず東京都に話しに行き、今から思えばすごく素朴な言葉でただどしく「私が自由に動けるようにこういうことをしてくれ」というようなことを話し始めたというのが、この世界に足を踏み入れ始めた第一歩ということですかね。そういう中で山田さんや中西さんと知り合って、同時に中西さんとは同じ頸損連絡会という団体の機関誌を出すというので彼が色々まあ今もそうだけど割と高等な文章

頸 損 連 絡 会 ニ ュ ー ス

頸 損 連 絡 会 機 関 誌 第 1 号

1 9 7 4 . 6 . 3 0

発 行 集 頸 損 連 絡 会

編 三 沢 了
東 京 都 新 宿 区 上 落 合 2 - 2 6 - 1 4
電 話 (0 3) 3 6 1 - 8 8 5 3

人 物 紹 介

先に配送した「呼びかけ」に応じて下さった皆さんを、「頸損を考える会」発足時点での会員として会を構成していきたいと思

います。そこで、「呼びかけ」に対する回答を基にして、会員の皆さんの簡単なプロフィールを紹介いたします。(順不同、敬称略)

山 田 昭 義 (在宅、名古屋市在住、学習塾経営) 三十一才

通信教育で中央大学を卒業、一年間スクーリングに通う。

障害者の新しい生き方を求めて様々な方面にアタック、現在名古屋で重度障害者の生活を良くする会で活動中、互に連絡をとり合う必要性を強調、地方都市在住の障害者の置かれている現実に注目し、豊富な情報・知識を得ることにより、地方都市障害者が障害者としての確かな認識を得るよう努力したいとのこと。運転免許所持

三 沢 了 (在宅) 三十二才

家族と共同で和文タイプの仕事をしている。住居を車椅子用に改造。都の進行する重度介護手当を授給。

日常生活の多くの部分に介助が必要であり、特に非常に強いけいれんがある、そのため外出を始めとする対外的行動に制限があったが、様々な情報に接するうちに障害者自身の動く必要性を遅ればせながら痛感している。会には積極的に参加していきたい。

中 西 正 司 (国立箱根療養所入所) 三十才

リハ関係の雑誌(ギヤセット誌等)の翻訳に参加。頸損は老人問題等の解決に努力すべきで、その方向で運動すべきとの意見を持つ。昨年より箱根療養所を中心にこの種の会の設立を検討中だったが、会の性格が閉鎖的なものになることを憂慮、会としての社会への積極的な対応の仕方を考える必要を強調。会データベース、作業方法の考案の伝達を希望。運転免許取得予定

人 物 紹 介 の ま と め

まず、最初におことわりしておかなければならないが、人によって多くのスペースを要した人もあり、かと思えば二、三行で終ってしまいう人もあったということ。これは、原則として「呼びかけ」に対する回答に忠実であろうとしたため、このような結果となった。

この紹介記事では、個々の人物像が明確に浮き出てこないというのは勿論であり、会員が相互にその人とを分り合えるようになるための有効な方策を考えたいと思う。

この記事を読んでお分りのことと思うが、ここに集まった人々を大別すると、施設・病院入所者十四名(箱根療養所、伊東重度障害者センター、東京厚生年金病院、都立身障福祉センター、用賀技能開発学院)と在宅者七名という内訳になり、その大半の人が自己の生活を形成する途上にあるという結果がでた。

またここに集まった人の中にも、いろいろな経験、知識、情報(例えば、職業・自動車免許・電動車椅子・その他)の持ち主がいる。その人々の持つ持っている、会員の多くにとつて参考になると思われるものを序々に引き出していかねばならない。

予想された事だが、概ね私達の生活基盤は極めて軟弱であり、生活環境は著るしく狭まらぬものでしかない。こうした現実を改善するために、私達の一人一人が、より広い視野からこの現実を深く見つめつつ、私達自身が実際に何をなし得るか、何をしなければならぬかを真剣に考えていかねばならない。

ここに集まった人の半数近くが頸損の中では割合に自由な行動が可能であろうだが、この他に私達の知らないところで、長い間、家の中に閉じ込められきりだつたり、寝たきりだつたりで人生を半ば痛めているような頸損患者がいることを考え、そうした人々を一人でも多く見つけ出し、積極的に参加をうながしていかねばならない。(三沢)

を書いて、私あたりがいい加減な文章を書いて
いると怒られて、「もっと信念を持ってちゃんと
書け」というようなことを言われて、だんだんお
互いに高め合ってきた、というようなことがこの
50年間の流れでしょうか。

交通アクセス運動

やっぱり本当に最初、私たちはただ壮絶に
生きていたけれども、すごく楽しかったなって
今思うところです。ほんとにやるべきことがいっ
ぱいあった。やっぱり、何でも自分たちで声
を出さなければ、あるいは自分たちが動かなけれ
ば、何も実現しないし形にならない。芽が吹き
出してこない、そういう状況の中で本当に何も
ないからこそやっぱり踏ん張れたなあというのが
あります。例えば私は、新宿に住んでいて、
お茶の水にある事務所に全部で15年ぐらい通
っていたのですが、その当時エレベーターも何
にもないから、毎日駅に「これからいくぞー」っ
て電話して、駅員さん達に5、6人地上に出て
きてもらって、私の車いすを階段で担ぎおろし
てもらって、また途中で乗り換えなきゃいけな
いので乗り換えて、それから目的地まで行って
という、毎日30人か40人の駅員さんの手を借
りて動かなければならなかった。それでもやっ
ぱり動かなければ、自分たちがやりたいことは
実現しないということで、何十年間かそういう
生活をしていました。

それともうひとつは、仙台から始まった車い
す市民集会の中でも街づくりとか交通アクセス
の問題とか課題ではあったのですが、これが
ひとつに大きくまとまったというのは、1980年

代の終わり頃、あるいは90年代のはじめ頃で
す。それまでも各地で街づくりの運動もあつた
し、駅改善要望活動なんかがあつたけども、
国の制度を変えさせないとどうしようもないっ
ていうように思って、みんなが立ち上がったの
はやっぱりこれは各地に自立生活センターがで
き、あるいは各地にこういう電動車いすで動く
ような人たちが顕在化してきて、その人達が一
つに集まれる運動が連帯していけるというそう
いう状況を作り出したことが、やはりこの交通
アクセスに関しても、国の制度を変えることに
繋がったんだと思います。

1988年にRI世界会議をやっていた時、DPI
が呼びかけ団体となって新宿の街に世界の障
害者の人たちにも集まってもらって、2～300人
のデモ行進をやって、事前に通告も何もしない
でそのまま100人ぐらいの車いすの人たち、あ
るいは歩ける人たちが新宿駅に押しかけたの
です。新宿駅はもう大混乱になっちゃって、そ
れこそ駅員はあたふたあたふたしているだけ
ど、そういうなかでアメリカの障害者の連中が
歌を歌い始めて、“We shall overcome”なん
かを歌い始めて、もう駅中が大混乱な状況にな
って、それでそのまんま私達は当時の運輸省ま
で押しかけていきました。日本のこの状況をい
つまで放っておくのだということを我々も言い、
それからアメリカやスウェーデンやアジアからき
た障害者の人たちも、そういう声を一緒に出し
てくれて、やっぱり何かを変えなければならな
いというような動きが起り始めました。10年
間これをずっと続けてやってきたことで2000年
に交通バリアフリー法という法律に国の制度が

電使連ニュース

1979年6月1日発行

編集後記

電動車イス使用者連盟の機関誌第一号ができてきました。連盟発足以来、一日も早くと待たれていたのですが、繁雑な活動と限られた人員故に延び延びになってしまいました。今回は、「電使連」発足にあたっての基本的な方向性や姿勢を明らかにすることを重点として編集されました。

機関誌の名前、いろいろ考えたのですが、なかなかぴたつとくるものが浮んで来ません。今回は、「電使連ニュース」として発行します。電動車イス使用者の皆さん、何か良い名前を考えてみて下さい。電動車イスで始めて町を歩いた時の例えようのない解放感とびりつとした緊張感を伝えるにふさわしい名前を。電動車イスをとりまく世界も、開発や給付制度などで新しい動きがみられ、だんだん複雑になっていきます。電動車イスが重い障害を持つ者の自由な行動を支える真と足として安心して使用することができるよう、一歩一歩確実に歩いていきましょう。

1979年6月1日発行電動車イス使用者連盟機関誌「電使連ニュース」No.1(編集人:三沢了)1、16頁より転載

座談会

電動車いすと重度障害者



小柴資子氏



三沢了氏



木村哲彦氏(司会)



秋山和明氏



河野敏夫氏

出席者(発言順・敬称略)

- 木村哲彦(司会)
国立身体障害者リハビリテーションセンター
第1機能回復訓練部長
厚生省社会局更生補修課専門官
- 秋山和明
電動車イス使用者連盟代表
- 三沢了
電動車イス使用者連盟会長
- 河野敏夫
財団法人工業株式会社特機設計部
第3グループ主任
- 小柴資子
日高区障害児者の生活を向上させる会会長

押田(国鉄身障者協会常任理事) 押田
でございます。よろしくお願いたします。
きょうは、私どもの協会の責任者であり
ます大和(理事長)が病休中のため、
代わってひとことだけごあいさつを申
しあげたいと思います。
皆さまがたはご承知だと思いますが、私
どもは「リハビリテーション」という雑誌
を三十年以上にわたって発行してまいりま
した。発行のつどテーマを定めまして、雇
用の問題、あるいは職業の問題等をテーマ
としてやっておりますが、このたび
電動車いすの問題を取り上げることにな
したわけでございます。
障害者の社会参加への意欲は、近年まわ
めて強くなってまいったところでございま
す。ことに一九八一年の国際障害者年を契
機といたしまして社会環境も徐々にではご
ざいませんが、整備されてまいり、また、障
害者自身の意欲もより強くなってまいりま
した。そのさい、脊髄の損傷、頭脳の損傷、
あるいはまた、肢体がきわめて不自由なか
たがためだけに電動車いすの占める割合も

「座談会 電動車いすと重度障害者」1984年「リハビリテーション」No.265、11-12頁より転載

変わって、ようやく少しずつ街の環境、交通アクセスの環境が変わり始めたという現象はあります。ただし、今これもすごく地域格差が生じつつある。バリアフリー法ができてしまっからの方が、格差が広がっている状況が生まれています。これをもう1回ぶちこわして本当に格差がなく、どの地域でも本当に動きたいと思う人が動ける状況を作らなければならないということに、もう1回運動の視点を定めていきたいという風に考えています。

介助保障運動と所得保障

私はいわゆる介助保障運動というのは、後ろのほうで一緒にやってきたということはありませんが、先頭に立って介助保障運動の旗を振ってきたことはありませんでした。介助保障のことは、例えば東京で言う「在障会」というような人たちの大きな力で東京都にはいくつかの介助制度ができて、それが国に影響を与えて、介助保障のためのお金が一応つけられるようになった。そういう状況はあるのですが、もう一方では障害者が生活していくための金、介助者に払うための金じゃなく、障害者が飲んだり食ったり住んだり服を着たり遊んだり、そうするための金というのが全然何も保障されていない。これは1985年に年金の大改正があってそれ以来は少し金額が多くなりましたが、1960年代は一月2,000円くらいの年金額しかありませんでした。当時、あめ玉年金というような言い方がされましたが、「2,000円で何をやれというのだ」と、所得保障をもう一つのテーマにすべきじゃないかということで、取り組んだということもあ



1994年3月28日、年金行動

ります。年金改正の時、一般の国民は、仕事ができない人はいわゆる老後の生活は年金で保障されるということであれば、障害者の場合は働きたくても働けない、年金を納めたくても納められない、そういう人が多いわけだからそういう人たちにはちゃんと一般市民と同等の年金保障をすべきだ、ということをずっと主張しました。これも実現するには10年近い歳月が必要でしたが。当時、厚生省と繰り返し話をし、ちょうど1985年の大改正の時、以前宮城県知事をやっていた浅野史郎氏が年金課長補佐だった時代ですが、彼とほんとに喧嘩に近い状況で夜遅くまでけんけんがくがくやり、なんとか20歳以前に障害をおった人の場合には一般市民と同等の基礎年金という枠を作ってそこで年金保障をしましょうということになりました。1級の場合には、一般市民の場合より25%アップのものを作りましょう、というところで一応手が打たれて、一定の最低水準の生活、経済的な生活保障は成り立ったのです。

ただ、残念なことに私も中西さんも障害者年金はもらっていないのですよ。お前達は20歳を過ぎていて、年金が払えるのに払わなかつ



1993年、第9回障害連総会

ただのだから、障害者になったからといって年金をやることはできないというので月々の年金額ってというのは入ってこない。これは課題として今後も取り組んでいくけれども、それ以前に本当に介助を必要な分だけ保障されるということと、介助を使ってちゃんと生きていくための経済的な働く場を広げさせていくということが重要です。しかし、「収入を獲得する」「働く」ということがなかなか難しい場合には年金なりで保障させていくというようなことをやっていかなければならない。健常者もそうですが、生活保護という制度に多くの人が頼らざるを得なくてそれを頼って生活をしていく。それも権利として認めさせていくということが絶対に必要なのですが、昨今ちょっといろいろな事件のようなことをきっかけに、国のほうがそれを利用してできるだけ生活保護を受給させないでおうとう動きも一方で出ているということを私たちは警戒しなければならないことだと考えています。

私が80年代から90年代にかけて力を入れてきた交通・街づくりの問題と年金の確立ということは一定のところまではきていますが、まだ全然完全なものではない。やっぱりこれをもっ

と完全なものにしていくためには、本当に運動の連帯、いろいろな運動が複合的に連帯していくという、そういう状況を作り出していかなければならない。そして、その核になるのがやっぱり各地の自立生活センターだというそういう思いを強くしています。

3.11以降の自立生活運動

本当にこの問題は、一つの地域の問題ということではなく、日本というこの国全体の有り様に関わることだと思います。今私たちは、中西さんに代表を務めてもらっている東北関東大震災障害者救援本部という全国的な支援の仕組みをつくり、あるいはもう少し大きい枠組みのJDFという枠組みでの支援組織をつくり、というような形でやってきています。国に対する意見書等もJDFを通じて出して、それぞれの生活の部分で必要なお金や人の調達、そういうことを全部実現させていくように今まだ働きかけを続けているところです。

ただ、こういう時にやっぱり地域というか、障害者の周りにどれだけ多くの人に関わっているのかというのが豊かな社会だと思います。そういう社会が本当に生きやすい社会だし、障害者自身もその為には自分の周りにできるだけ多くの人を取り巻いていけるような、そういう個人としての働きかけや魅力を磨いていくということも必要だし、自立生活センター自身も常日頃そう言うことをある程度頭に入れた形で人を集め、全部が全部ヘルパーでなくても、人が大勢集まれるようなそういう場になって欲しいと思います。



1986年施設費用徴収反対運動

自立生活センターにとって介助サービスは重要な事業であり、それは欠かす事ができないし、発展させていかなければならないのですが、ただ単に介助派遣をする場所ではない。やっぱりお互いに顔を見合い、お互いに仲間になり、お互いにその人の生きていることをみんなで見守っていくためのその為の人が集まる所で、その中の何人かがヘルパーとして直接的に介助に関わったり生活の支援をしたりという形になるのだと思います。これまでの自立生活センターの活動の上に、もう一つ3.11以降の状況がある程度入れた形で事業というか、自立生活プログラムやピアカウンセリングと並んだ形で、自分たちがそうとう困った状況になった時にどう生きるかということ学ぶ機会をできるだけ多く作って、東北で今頑張っている皆様を全国に散っていただいて、その話をぜひ伝えて欲しいなと思っています。

次世代への期待

先日、あるところで70年代の運動をやってきたおじさん連中と話をすることがありました。その中の一人が、養護学校の義務化とか金井

康治君の闘争とかいろいろな闘争をやってきた人で、「今の障害者は言葉を発しない」という言い方をされたんですね。僕はよく考えてみたら、違うんじゃないかな、と。その当時は、ごく少数の人間は、声をあげていたのかもしれないけれど、今、この私たちの立場から言えば、2003年の支援費制度の上限問題からこの10年、総合支援法という法律ができるかできないかという状況になっていて、その中で、僕は障害者一人ひとりが、本当に自分の問題を自分の言葉で出すことができるようになったのではないかと、出すことが当たり前になったんじゃないかというふうに思うんですね。

だから必ずしも僕は、今までの運動いわゆる古い時代の衝突型あるいは、行政追求型だけの運動じゃない。もっと声を一つにまとめてどかんとぶつけていく建設型の運動というのを、もっとつくっていける土壤がようやくこの10年ででき始めたのではないかと期待をしているんです。ただし、みんながみんな運動家になっているかというところではない。運動家になる必要もないし、なりえない。

ただ、自立生活センターあるいは自立生活運動に関わる人は、やっぱり何のために自立生活運動はあるのか、ということをちょっと振り返る、ちょっと頭の隅で考えてみるというのがその都度必要なことだと思うんですね。どんな人でも普通の市民としてちゃんと自分の権利を行使して、社会の中で生きていって、楽しい時、悲しい時、苦しい時いろいろあるけれども、そういうことは誰かに強制されて考えるのではなく、自分の意思として考えていくというそういう機会が絶

対に必要だと思えます。

政治とのかかわりというのも、繰り返し、繰り返し言っていくしかないな、というのがこれまで何十年やってきて思っていることです。やっぱり一つの課題が、世の中の課題になるには10年、20年はかかってしまいます。そんなに待ってられるかと言う思いはあるのですが、10年、20年の中でだんだん変わっていく。そういう変わり方をしていくには、自分たちがこういうことを語っているんだと言うことに政治家が少しでも耳を傾ける、言葉として本当に真意が分かるかどうか、そんなことはともかく、どうしてあいつらそんなことを言うんだということをおぼせさせるだけでも良いから、繰り返し言っていくことだと思えます。やっぱり途中であきらめちゃったり、途中で放り投げちゃったりしたら、絶対ダメです。

制度改革推進会議という新しい動きができて、新たに政策委員会という新しい国の機関ができて、これもいわゆる昔の中央施策推進協議会という年に2回しか行われないうセレモニーとしてやるような協議会ではなく、本当に意見を闘わせる、ぶつけ合う会議が国で生まれているんです。こんなことは、僕が運動を始めた当時とか、あるいは80年代、90年代にしてもとても考えられなかった。今また別の政権に変わっても、新しくできた政策委員会は変わらないし、その質は私たちが変えさせてはならないことだと思うんです。それは政策委員会に出ている人に任せてしまうのではなく、いつもその人たちの動きや発言をちゃんとチェックし、監視していくこと。自分



2004年6・9障害者の地域生活確立の実現を求める全国大行動。
前列左から三澤さん、楠敏雄氏、尾上浩二氏、中西正司氏

たちがそれを「よし」とするのか「ダメ」とするのか、ちゃんと自分たちの意思をつくりあげていくことが絶対に大事だと思います。

私は今、DPIの議長をやっていますが、DPIの運動はJILの運動と不可分ですし、JILの運動に支えられる形でDPIの運動は一緒にやっていくことになると思うので、この二つだけは絶対にこれらの新しい動きというのを途中で止めさせないこと。そして総合支援法でも三年後に改正に向けて大きな課題がいくつか残されています。中でも障害程度区分という医療モデルでサービスの量や質が決められてしまう、これをなんとかぶっ潰していく、もっと違うものにしていく、そのために私たちはこの三年間黙っていて三年後に物を言うのではなく、今から私たちの言葉で主張を続けていかなければいけない。本当に運動が停滞する時があってはならないというふうに考えています。

私も一回死に損なって復帰したので、とりあえずはもうちょっと生かしておいてもらって、もうちょっとこの運動をみんなと一緒にやっていきたいし、20代、30代、40代の人からいっぱい



2012年JILセミナー。左から樋口さん、中西さん、山田さん、三澤さん

刺激を受けたいなと思います。当事者だけでなくやっぱり当事者が声を出すことでやっぱり障害者問題がいつまでもマイノリティじゃダメなんです。より多くの市民を巻き込んでいくそういう

運動展開も必要になってくると思います。

(2012年5月29日JIL全国セミナー「JILの役割と障害者運動の展望」の記録より抜粋・再編集。
編集：西尾直子)

点字印刷 承ります！

デジタルデータが手軽に作成できるようになりましたが、視覚障害者にとって対面での説明、会議・講演会資料などはその場で確認できる点字資料が便利です。会議資料、ニュースレター、カタログ等、どんなものでもお引き受けいたします。まずは見積もりについてお問合せください



印刷したい文書の文字数	部数	価格(目安)
5,000字(A4用紙4枚程度)	10部	14,000円程度

- * 名刺への点字印刷100枚 1500円(送料別): 所属・名前・電話番号等を点字で打ち込みます)
- * 日本語のほか、英語点訳も承ります(その他言語も応相談)

お見積もり・ご注文などお問合せは下記まで。

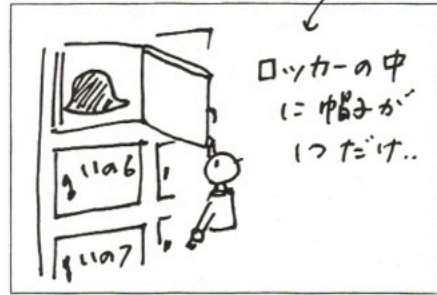
特定非営利活動法人DPI日本会議 点字印刷 ビギン (担当 上 蘭、笠柳)
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 3-11-8 武蔵野ビル5階
TEL 03-5282-0015 FAX 03-5282-0017 Eメール tenji.begin@dpi-japan.org



130529 衆院内閣委員会傍聴後



11の5番2777以外
の持ち込みは
X.



* [DPI日本会議われら自身の声] Vol.19-4 より転載

* 2013年5月29日差別解消法について衆議院内閣委員会傍聴 (H事務局長メモ)

プリントコミュニケーション
創造から企画・編集そして印刷

DESIGN & PRINT 株式会社 興栄社

(電話)03-3681-2977 (FAX)03-3681-2990

〒136-0071 東京都江東区亀戸2-3-13
e-mail info@koueisy.com
U R L http://www.koueisy.com/

DESIGN & PRINT
F-010002

三澤さんの闘病 ～お姉さん、三澤里子さんのお話～

三澤了前DPI日本会議議長は2013年9月30日に亡くなりました。3年前に胃癌を患い、一時は生死の境をさまよったものの奇跡の復活を遂げ、東北関東大震災障害者救援本部や障害者制度改革において精力的に活動を続けてきました。6月の障害者差別解消法の成立をめぐりデモや集会等の先頭に立っていつもどおりの元気な姿を見せていました。その後、7月には肺炎で1ヶ月の入院をされ、退院後には元気な顔を見せていましたが、9月9日に再入院、3週間後に亡くなりました。闘病を支えた、お姉さんの三澤里子さんにお話を伺いました。

...

了(さとる)は4人きょうだいの末っ子で、伊丹で生まれました。昔は単身赴任なんてなくて、父が転勤族だったので、きょうだい4人とも違う所で生まれたんです。了が小学校2年生、私が6年生の時に父が亡くなり、東京、新宿区の落合に家を買って引っ越してきました。以来、ずっとここに住んでいます。了の大学受験のときには小学校の時の先生たちが家庭教師に来てくれて、近所のお友達も5人くらい一緒に勉強していました。

20歳の時、お正月に友達とスケートに行こうとして交通事故にあって受傷しました。15日間は危篤状態で、熱が高くて「ご家族の皆さん呼んでください」と言われました。1ヶ月くらいして関東労災病院に転院して、1年くらい入院したあと「お家のある方は帰ってください」と。体に合わないすごい大きな車いすに乗って、ただ帰されてきました。リハビリの段取りも全然分からない。

そのうち、6、7年経ったころ、友達で薬剤師をしている人が「都の障害者センターがあるから」ということを教えてくれて、判定を受けに行きました。そこで重度の人は介助者を付けるように言われ、私がお仕事を辞めて了に付き添って入所しました。半年といわれたのを一年に延ばしてもらって、そこで和文タイプを習いました。私も神田の学校で和文タイプを習って、私も一緒に家でタイプの仕事をやることにしました。国鉄時代だったわね。駅では「車いすは一人じゃ絶対乗せない」と言われて。ここ東西線の落合駅も、駅に電話をかけて「今から行きますから駅員さん5人くらい来てください」って言って、階段を降ろしてもらってました。何にもなかったわね、そういえば。いい時代になりましたよね、全体的には。

了が30代の頃、八王子自立ホームができて、「言いだしっぺが入らないわけにはいかない」と入所しました。廊下で和文タイプをやって、私が原稿を取りに行きました。そのうち他の仕事が忙しくなって、タイプはやらなくなりました。今岡さんに会ったりして、弁が立つ方だから刺激を受けたんじゃないかしら。その後、戸山に引っ越しました。みんなが介助に入ってくださったから生活できたようなものですね。3年前の手術後は特にできなくなっていた。力が出なくなっちゃって、やせて、お食事も「スプーンが重い」ですって。胃を全摘してから、食べられなくなっちゃった。24時間高栄養を入れて、その後だいぶ食べられるようになった。

一震災前に三澤さんが一時危篤になって救急車で運ばれた時はどのような感じでしたか？

そう、呼吸器の方も元々悪いでしょう。介助してもらわないと痰がなかなか自分では出せない。夜10時から介助者が入っていたんだけど、私が夜12時頃呼び出されて、「車いすに乗せてくれ」と言うの。車いすの方が少し楽だと思ったんでしょうね。リフトに乗せたら、息していないのよね、もう。青い顔をして。あわてて救急車を呼んで。すぐ来てくれました。知らない病院に連れて行かれたらたいへんだから、「この人7月に胃を手術したばかりで10月に入院する予定だったので、そこへ行ってください」と診察券とか見せて。その後、朝3時頃に先生から「いい状態ではない」と言われて、でもそんな夜中に知らせるわけにはいかないでしょう。朝6時頃かな、今西さん、池上さん、うちのきょうだいに電話して、皆来てくれました。そうしたらお昼頃に先生が見えて「自発呼吸しています」って言ったの。だから「この人結構、執着しているわ」と（笑）。本人は目が覚めて「俺なんでこんなところにいるんだ？」と。「あんたが死にそうになったからでしょ」と言っ

まあ何回も死にかけましたね、あの人、本当に。お葬式の後、家で遺体を寝かせていたときに、介助者の方が「お葬式には来られないけれど、伺います」と来てくれて、その時に「ひどかったね、あの時は」「何とか生きてね」と話しました。あの後結構回復して、胃を取ってから3年生きた。抗がん剤は無理だったのね、「のんで、のんで」と頼んだけど、本人が「絶対ダメだ」とやめちゃったの。高栄養入れて、食べられるようになった。

最後は、癌が再発したというわけではなかったようです。腹水がたまって、あまりいい状態ではないわね。亡くなったあとで腹水を丁寧に調べてみたら「癌の芽みたいなものも見つかりました」とは言っていました。9月に亡くなった。

7月に1ヶ月、肺の方で入院したときには病院は全然食べさせてくれなかった、「誤嚥性肺炎になる」からと。点滴栄養していたけれど、食べるのと全然違うものね。8月は家に帰ってきて、食べたいもの何でも食べさせていたのね。腹水がたまっていて、外科の方に行ったら「もう何も食べなくていいです。すぐに入院しますか？」と言われたけれど、「土・日だから月曜日に来ます」と言いました。土日うちにいるときは「ご飯食べる、秋刀魚食べる、ウニ食べる」とかいろいろ言っ

て、秋刀魚なんか早いからうんと高い、「買わないわよ」と言ったんですけど。買い物に行くとき、「荷物持つから、行くよ」とか言っ

てついて来て。秋刀魚、400円もしたので「ウニ買ったからいいんじゃない」と買わなかったんですが、「あの秋刀魚うまそうだったなあ」って言うの。しょうがないから、あくる日買いに行きました。一生懸命食べていましたけれど。入院したら何も食べさせてくれなくて、「俺こんなに食べないでいたら死んじゃうよ」とか言っ

ていましたけれどね。

胃の手術してから韓国にも行けたしね、よくがんばったほうよ、ね。その手術する時はシンガポールかどこかに行く予定で、「そこ行ってきてからでいいでしょう」とか言うもんだから、「すぐ治療に入った方がいいでしょう」と先生に言われて。忙しくしてたからがんばれたのかもしれないね。（談）

（聞き手：浜島恭子）

1942年4月1日兵庫県伊丹市に生まれる。小学校2年の時に父の逝去により東京都新宿区上落合に転居。以来、生涯にわたって新宿を拠点に生活する。中央大学法学部に在籍。ジャズに熱中し、トロンボーン奏者として楽しい学生生活を送っていたが、1964年1月、交通事故で頸髄損傷となる。大学は中退した。

受傷後、7年ぐらいたったところで、リハビリテーションを初めて受け、同じ障害を持つ人に声をかけ始める。20名ほどの仲間を見出し、1973年4月10日、「頸損を考える会」の設立集会を行う。のち、1975年に頸髄損傷者連絡会と改称し、会員50名余で第1回総会を開催した。頸損連絡会が最初の運動として取り組んだのは、電動車いすを給付する制度を作れという働きかけであった。1977年11月に発足した「電動車いす使用者連盟」では、会長を務めた。運動の成果もあり、1979年4月から電動車いすは補装具給付品目の対象となった。

1975年秋、のちに自身が代表となることになる、障害者の生活保障を要求する連絡会議(障害連)が発足した。結成には参加せず、オブザーバーとしての参加であった。障害連を通して、障害者の所得保障の確立を求める運動に身を投じていく。1979年に結成された、全国所得保障確立連絡会(所保連)が、1981年に行った「脳性マヒをはじめとする幼い時からの障害者の所得保障制度新設に関する統一要求」の呼びかけ人になったのを皮切りに、30年あまりに渡り、障害者の所得保障要求運動の先頭に立って活躍する。障害基礎年金が創設(1985年)されたのちも、学生無年金障害者の当事者として、無年金障害者の解消や、生活保護、反貧困運動など、幅広い連帯の結集軸となった。1993年6月には、公的扶助研究会の『公的扶助研究』差別川柳事件が起き、障害連の代表として、事件の告発を行った。また、基礎年金制度創設と同時に組み込まれた、「費用徴収制度」の改定を求めて、「障害(碍)者の完全参加と平等を目指す全国共闘委員会」を立ち上げ、授産施設の障害者とともに、厚生省前座り込みなどの運動を1986年に展開、1988年に費用徴収の対象から親を外すなどの成果を得た。

その間、私生活では、1982年に東京都で初めてのケア付き住宅として作られた八王子自立ホームに入居する。初めて家族以外の介助による生活を営むとともに、天井走行リフトをはじめとする生活機器を積極的に取り入れた生活を体験した。1987年10月に八王子自立ホームを退去し、新宿区戸山町にある一般の都営住宅で单身生活を開始。单身生活をするにあたっては、住居を電動車いすのまま使えるよう改造し、必要部分には有料の介助スタッフを入れて生活を作った。

自立生活運動とは、1983年の日米障害者自立生活セミナーの実行委員として名

を連ねたところから関わりはじめた。1988年4月、新宿ライフケアセンターの設立に発起人として参加し、その後、代表に就任した。また、1991年11月の全国自立生活センター協議会設立には、同センターの代表として参画した。

電動車いす補装具給付の要求運動と並行して、「まちづくり運動」に早くから参加し、車いすガイドブックの作成など、障害者の移動の自由を求める活動にも取り組んでいた。1988年、RI(リハビリテーション・インターナショナル)の世界会議が東京であったとき、DPI日本会議を中心に「RIを機に行動する障害者委員会」を結成し、交通アクセスの改善を求める行動を行った。この行動は、のちに「誰もが使える交通機関を求める全国行動」として、毎年継続されることになる。交通問題は、所得保障と並んで、三澤さんのライフ・ワークの一つとなった。

DPI日本会議との本格的な関わりは、1992年の事務局長就任からである。三澤さんが事務局長を務めた10年余りで、DPI日本会議を軸にした障害者運動が大きく花を咲かせた。交通行動の全国展開、全国での総会開催、会員組織の拡大など、挙げれば数限りない。中でも、1995年に三澤さんたちが呼びかけてスタートした「障害者政策研究全国集会」は、障害当事者運動が政策立案能力を高めるきっかけとなった。また、2002年第6回DPI世界会議札幌大会では、組織委員会の事務総長として、政府や全国的な障害者団体を大きく取りまとめ、DPI日本会議が日本の障害者団体の中で確固たる地位を築きあげるのに大きく貢献した。こうした積み上げの上に、障害者権利条約の批准や差別解消法の制定などの成果がある。

海外との関わりも少なくない。1988年頃に東京都の姉妹都市交流事業でニューヨークを視察したのを皮切りに、世界人権会議(1993:ウーン)、DPI世界会議(2007:ソウル)、DPIアジア太平洋ブロック会議(1992:北京、2012:ソウル)、DPI北東アジア地域委員会(2009:ウランバートル)、RNN(アジア太平洋障害者の十年推進NGO会議)(1993:沖縄、1994:マニラ、1998:香港、1999:クアラルンプール、2000:バンコク、2001:ハノイ)、自立生活サミット(1999:ワシントンDC)、日米運輸省専門家会議(2000:ハワイ)といった、障害に関する国際的な舞台でも、日本の障害者運動を代表して参加した。

2003年にはDPI日本会議議長に就任。生涯を終えるまで、日本の障害者運動の未来をつくる先頭に立ちつづけた、そんな一生であった。

2013年9月30日、国立医療センターにて逝去。

(ヒューマンケア協会 プロジェクト・マネージャー 宮本泰輔)

前略

新しい年まわがお起えてしようか。昨年10日にお便をいただきながら、ご返事が遅れて申し訳ありません。機関誌が事務局通信で二返事しようと考えていたのですが、発行に手間どりそうなので、とりあえず私の考えをお伝えいたします。

お便りの「自立生活」ですが、何をもちて自立生活と呼ぶのかは必ずしも問題です。確かに東京は他の地域より職業に就いている頸損者の数はいくらか多いものと思われ、家族から離れてアパートで一人暮らしをしている重度の障害者の数も少しずつ増えてきています。しかし、仕事(職業)に就いている、一人暮らしをしているというところが即自立生活ということにはなりません。

私たち従来考え、追求してきた自立生活の条件とは、一つには他人に全面的に依存せずに生きていくための経済的な自由の確立であり、二つには、必要に応じて目的とするところに自分の意志に従って行くことのできる移動の自由の確立(可能範囲)第三者への依存を排した)であり、第三に生活し、活動するための住居をはじめとする環境の整備ということですが、それによって基本的条件の上に立って、依存の関係を生まない介助体制をつくり上げていかなければならないと考えられています。常に電動車イスでなければ動けない私にとって介助は必要不可欠のものですが、介助を生活の絶対条件にする前に、介助に頼り切らなくて済む生活条件をどう社会的に作り上げていくかということが優先させなければならぬと考えられています。

自立生活を考える時、もう一つ重要なものは、社会的つながりの中で自分の目的をどう持つか、どう具体化するかにあります。

というところであります。社会と関わりを持ちたいというところで人間のあたりまえの生活はありたいと考えます。私の場合は頸損の仲間、そして多くの障害者の仲間と共に私たちが生きていくための条件を確立しよう社会に働きかけたいことを私の仕事と考えています。その過程の中で多くの仲間が生まれ、生活面でも力や知恵を貸してくれ、今の私たちに黙って待たせても決して充分な介助体制や生活条件が整備されることはありません。特に公的介助サービスは障害者側から必要最低限度を明かすかにはしたくないにも関わらず現実的な掘起と運動がなければ具体化しないと考えます。頸損連絡会として取り組んできたデー

夕を豊富に集めた活動を行いたいと考えています。一人一人の障害者の方がそれぞれ地域で仲間と力を合わせ、地域特性に合った介助体制を作り出していくこと。地域行政をはじめとする関係機関に働きかけていくことが何より大切であると考えます。いくつかの地域では重度の障害者を中心に介助派遣事業を行なおうと準備しています。障害者の生活に合った介助のあり方や質と量の関係を明らかにしたり、小規模でもカーブス事業を試みたりする多様な動きが、より充実した介助体制を作り出していくことにつながると思います。

さて、もう一つの自立ホームの件ですが、私は現在その自立ホームに住み、活動しています。自立ホームを一口で言うことは非常にむずかしいのですが、あえて言うならば、障害者を持つ者の生活の場であり、かつ障害者新しい生活方を追求する実験の場であり、そして生活条件をつくり上げていくための運動拠点であります。建設以来

建設以来

障
害
者
の
持
つ
者
の
重
い

3年を経た現在でも様々な試行錯誤を行っておりますが、課題として持つものは、障害者の所得保障の確立、住環境をばいめとする生活環境の整備、通勤の自由の獲得、介助の質と量の追求といったものであり、そうした課題に対して日々の生活をとおして問題提起を行ったり、改善のための働きかけを行っております。昨年は、障害基礎年金の創設や福祉法改正に関して行政や立法府に対する活発な働きかけを行いました。他にも電動車イスや電動ホイーストに関する研究、公共交通機関を利用しやすくするための実践等、障害者の生活の質を高めることに向け、少しずつ活動を進めています。自立ホームは東京におけるケア付住宅として検討、建設され、検討段階から障害者当事者が参加し、建設設計、建設されたもので、検討の過程で、単に障害者が必要か介助を受けて自立生活をエンジョイするだけでなく、先にも述べたような目的を共有化しながら、障害者の自立生活を追求するものにしていくという方針が確認され、その方針に沿って現在運営が行われています。

長く悩んでまいりました。お問合せに対して的確な回答になつていないかも知れませんが、私の言いたいことを勝手に述べたただけに、かえりません。要は、私たちに必要となる件や環境は、私たちが自身から提起し、運動する以外には作りに出れないのでは、ないかということ。そして、そのためには一人一人がバラバラに力を出すのではなく、多くの力を合わせること、不可欠だと考えます。

様



印刷

オフセット&オンデマンド印刷
名刺(片面100枚:1000円~)

有限会社 **かいらす企画**

〒185-0032 東京都国分寺市日吉町2-15-2
TEL 042-505-8495
FAX 042-505-8935
mobile : 090-3804-7955
mail : kairasu@mue.biglobe.ne.jp



みさわ さとる 三澤

1942年生まれ。1963年（中央大学2年生時）交通事故に遭い、頭部損傷の障害を負う。1973年運動障害者連絡会を結成し、それ以降、障害者運動に関わる。1985年障害者の生活保護を要求するDPI（障害者インターナショナル）の創立メンバー。2000年まで、1993年DPI（障害者インターナショナル）日本会議事務局長、2004年に議長就任。



よこた ひろし 横田

横浜市磯子区在住。脳性まひ者。1933年5月横浜市で生まれる。不就学。1964年マハラバ村に移り、1966年結婚、翌年長男が生まれる。1968年マハラバ村を出て、青い芝神奈川県連合会に参加。1973年同会長、1977年に青い芝全国総連合常務長代行となり、最へ、著書などに、「家族」（1974）、「障害者親しの想い」（1979）、「否定されるいのちからの問い— 脳性まひ者として生きて」横田弘対談集（2004）ほか多数。

「生きていってはいけないのかという、それだけです。」

「障害者は当たり前」

対談

● 自分を認めること

三澤 尊厳死とか、生命倫理、優生学等の動きがいろいろおわれています。そうした中で障害者の生「尊厳死」といったことについて、障害者の立場から改めてものを言っていく必要があると思います。障害者の世界だと、優生思想に対する闘いを青い芝の会が一番先頭になって取り組んできたと考えると、優生思想というものは昔で終わったわけではなく、形を変えて今に続いていると思う。運動をふりかえりながら、今の状況をどう思っておられるかなど、いろいろお話を聞かせてください。今は作業所をやっておられるのですか。

横田 神奈川は作業所じゃないと金がつかないからね。若い人にはは任せ、僕はグループホームの運営委員長と、あいかわらず青い芝の会神奈川の会長をやっています。

三澤 全国青い芝の会とも深いつながりをもっているんですか。

横田 深いというか、神奈川は一応、下部組織ですからね。

三澤 昔、白石清春さんが全国青い芝の会の会長をやっている時は、ときどき神奈川にお伺いしました。横田さんと初めてお会いしたのは、1975年の京都の車いす市民集会でもしたんです。私が障害者になって10年くらいな集会だったので、初めて外に出たのが京都の言語障害を理由にだれも聴いていない、横田さんがすごく怒っておられました。そういう場だったから、話の内容は覚えていませんが、怒っていらしたことが印象的でした。青い芝は、最初はそんなに戦闘的ではなく

懇親会的なグループでしたよね。
横田 青い芝は、光明義塾学校の同窓会が母体です。花田春光さんや、みんなが仲間だったんだ。だんだん、取組みが社会運動的な形になってきた。当時は、障害者が社会運動をするというのには考えられず、ボランティアもいなければ、親や家族が障害者を外にだすことはなかったですね。

青い芝の会は社会運動を専門にやるようになったのだけど、承けない仲間達が社会から疎外されていたのでした。いろいろな状況があった。たまたま神奈川の小山さんや茨城の仲間達が加わって、マハラバ村に行ったんです。（編注：マハラバとは「偉大な」(マハ)「叫び」(ラバ)を意味するサンスクリット語。大仏和尚が、自らのお寺を開放して設立した。このコミュニケーションの中で醸成されたものを承けついで「青い芝の会」は、1970年代に激しい障害者解放運動を展開した。）マルクスや観音までいろいろなものを見ながら、その後の青い芝の会の基本的な考え方を、仲間達が手探りしながら打ち出したということです。

脳性まひ者は、言語障害がある。一般の障害者の仲間に入れてもらえないわけですよ。そういう自分のあり方を認めろと。脳性まひを自分で認めるということは、じゃあどうやって生きるのかということになるので、そこを一番考えました。

三澤 自分たちが社会でおかれている位置や状況を認識して、受け止めて、そこから問題を問いかけていくというのは、個人ではなく皆がそうした同じような意識になったということですか。

横田 自分は承げないが、耳は聞こえるとか、



人間誰しも、自分のどこかに優越感や差別感がある。

三澤 自分の中遠障害で、20歳で首の骨をおって10年くらい家に寝たきりでした。そういう状況は嫌だなというのはあったが、社会的な差別ということについては、自分自身が認識としてもなかつたんですよね。障性まひの人たちと一緒に活動しはじめて認識しました。

横田 これは今でもそう変わらない。若い人たちは、社会条件があるから、学校へ行こうと思つたら養護学校、養護学校を卒業したたら作業所や障害者施設。そして、とりあえず、年金はある。僕たちの場合は、年金も一カ月わずか4000円でした。だから、経済的にも苦しく、社会的には差別ばかりだった。映画にもいけなかつた。映画館に行っても「入ってくるな」とお断りだった。物理的にも入れなかつたけど、それだけでなく、「今は議員だから入ると困る」とか。

三澤 いっぱいだからとか、予約が入っているから、と断られてきたことは私も経験があります。

横田 三澤さんが活動を始めたころは、少しはよくなってきたのではないかな。

三澤 如言のまちづくり運動や車いす市民集会なんかで、街づくりの動きが少しずつ出てきた時期ですね。朝田さんの場合、そういう差別を自覚されて、それをこに生きてきたみたいなものはあるのでは。

横田 大きなきっかけは、横田の障害者が殺された事件。お母さんが、障性まひの子どもを、首をヒモで締めて殺した。一人の人間を殺した。昭和45年のこと。ご近所、町内会で、加害者のお母さんに対して、あれだけ例をみた子どもを殺すというのは、殺した親がかわいそうだと、裁判員運動や、署名活動が起つた。

一般的に言えば、そういう対応が当たり前だった。それを僕たちは、障害者が殺される、殺した親が裁判員になるということは、自分の存在が社会では認められないことになる。障害者はいつ殺されるか分からない、殺してもいいんだということになりましたよ、と考えた。冗談じゃないという気持ちがあつて、神奈川青い芝の役員会に持ち込んで、この問題を茨城の仲間や、全国青い芝の会の会長になった横塚君と話し合つて、これは黙っているわけにはいかないというこになった。中には、殺した親の気持ちの方が分るといふ障害者もいたけれども、おかしかった。自分が障害者であっても、結婚もしなければ、子どももないものが親の気持ちの方が分るわけないだろうという考え方でですね。障害者の自分が死ぬかもしれないというこを間違なく考え始めたのです。

● 青い芝の会編年

三澤 その当時、そういう反応をしたのは青い芝だけですね。他の障害者団体はなりましたね。福神奈川の他の障害者団体はなりましたね。福

横田 今も、似たような事件がありますね。福神奈川の他の障害者団体はなりましたね。福

横田 横塚君を出していた。僕が横塚君の編集をやっていたので、1975年1月に新年号といて作つた。書いてのつけたのはいいが、後の中に滑かんできた。1時間から2時間くらいで怒られた。横塚君や昔から…。こんなのは使えんと言われたが、書いてしまったものは、しようがないということで(笑)、今は青い芝の会の行動綱領。(編注：面を参照)

三澤 横田さんと横塚さんの共作のように思つていたので。

横田 いや、横塚君には怒られた。(笑)

三澤 裁判員運動に対する取組みなどの中から、自分たちの考えをまとめて社会の中で取組んでいくことですね。

横田 一般の人の立場からすると、とんでもないことだよ。私教的に愛というのには、執着心なんですよ。やさしく言えば、自分から相手をお母さんで、障害者をお母さんが愛するから養護学校に入れようとか、かわいそうだから殺した方がいいとか。

青い芝の会編年 (要約)
我々は障性障害であることを自覚する
我々は強烈な自己主張をおこなう
我々は障害者文明を否定する
我々は親と正義を否定する
我々は問題解決の手段を選ばない

そんな寛らばいらない。正義というの、結局は数の多さで決まる。多数決の論理なんだですよ。例えば「自立支援法」は、障害者がいにくら頑張つても反対しても、国会で決まらしてしまふ。決まらしてしまふんです。

三澤 社会の中の正しい仕組みですよ、とみんな思うわけですね。

佐々木 この運動は70年くらいから始まったんですよ。僕はまだ生まれていない(笑)。

三澤 横塚さんと、茨城でござんたんなかよ。小山さん、横塚さん、矢田さんなんかは、昔さんマハラハ村ですよ。私は横塚さんだけはお知り合いになる機会がなかつたんです。

尾上 私は78年くらいに障害者運動に関わり入りました。「さよならCP」の上級運動から入りました。活動を始めて3、4ヶ月してみんなが意気消沈したということがあります。横塚さんがとくなくなつたというので。当時は訳がわかりませんでした。

横田 横塚は頭が良かった。今のグループホールの原形のようなことを1973年から、神奈川青い芝の会の会報に書いた。障害者何人くらいが集まって自主運営で行うようなことです。時代が早過ぎて、その時は実現しなかつたけれど。

尾上 原体験としてマハラハ村の共同生活があ



横田 青い芝の会は当なり前の事を言ってきただけで。障害者は当なり前に生きていく

横田 ありますね。殺される側からの発想で、減刑嘆願に抗議の声をあげて、それ以降、厚生思想への問いかけの一つの大きな柱になったと思います。

横田 神奈川青い芝の会で、73年、74年の厚生保護法の「改正」が自分たちの生命を考えた時にどうなるかということなんです。お母さんのおなかの中で殺されるということを知ってはいけませんよ。こんな法律をつくったら大変じゃないかということでした。青い芝の会、全国的な運動にもなりました。

三澤 95年の母体保護法の時ではないのですか。あの頃から、胎児ということの方が分かったから中絶してもよいということに対して批判をしてきたのです。女性団体とは協力しなから関係を持ってきたのですか？

横田 いや、73年、74年の時からだったんです。初めは大変だった。女性団体は、産む・産まないは女性が決めると言っていて、僕たちは障害者ということが分かって産む女性はいるか？ということになりました。何度も話をして意見を言ったが、意識の根本的な解決はまだまだでしょうね。

三澤 私たちも似たような経験があります。3、4年程前に、障害者差別禁止法をつくろうと

いうことで、政策研（障害者政策研究全国集會）でプロジェクトをつくって要綱案をまとめました。途中に、妊娠中絶のこを入れるかどうかということ、阻止連（SOSHIREN・女（わたし）のからだだから）の米津さんがこのままではちょっとなかなか受け入れられるのか難しいということ、3回くらい女性運動の人たちと話し合いました。でも、なかなか難しいですね。

横田 これ、こういう人は悪いということを決めていい、こういう人は悪いということについては、普通の認識になると思います。

横田 今の社会状況を考えると、女性が安心して産める状況ではないですね。そこをどう改善するの必要ですね。

三澤 横田さんの本の中（編注：「否定されたいのちからの問い」）で、米津さんとの対談でおっしゃっていましたが、子どもができたということ自体は本来うれしいことなのに、胎児診断をやって、この子は五体満足ですよというお慰めを医者がからもらわないと、安心して産まないという変な状況を作ってしまったということはありません。

佐々木 この問題は、ビジュアルアースでも問題になって分科会でやっていたことでもあります。

● お金と命の問題

三澤 生まれる権利ということに対して、それを抹殺する法律が出され、それに對する抗議の運動を経て来られた。一方で、今、生命維持などの問題で、そんなに金が掛かるならば生きていくよりも良いのではないかとこのことで、「尊厳死」などのようなことが議論

されるようになってきましたね。今までは表立って言われなかったと思うんだけど。

横田 私人として考えた場合は、生命維持装置はいらなくなるかと思う。決まった生命がある。

三澤 自然な形で生きていくのが当たり前という事です。

横田 これは、とても難しい課題で私自身も非常にまよっているんです。命の問題をこんな簡単に科学だけで考えること自体、とてもおかしいんです。

三澤 最近でも、認知症の親を殺したり、親と障害児が心算したりと、横田さんたちが普通されてきたことかといっている状況が、今も続いているように思っています。

● 自分の問題として

横田 これから、もっと多くなると思います。そういうことに、どういうわけか若い人たちは怒らないんだよね。僕にはわからないのですがね。自分達が生きにくくなるということ、考えてみようかといっているのだけ。

三澤 そのとおりですね。最後に、繰り返し部分もあるかもしれませんが、2つお願いします。一つは、障害者殺しの基本に立ち返らないといけない。以前は、障害者の周りの人が大変だ、ということと障害者が他人に殺されると

いうことでしたが、今は、自己決定、自己選択ということで「死」を選ばせられないような状況がある、障害者にはあんなに存在しないのは昔も今もあまりかわらないのではないかと、そんな状況に一言お願いしたいです。

横田 青い芝の会は当なり前の事を言ってきただけで。障害者は当なり前に生きていくはいけないのかという、それだけです。DPIにも、物取りの要求運動ではなくて、障害者解放運動をやってほしい。二つ目の質問については、僕がなんか言っても、肝心の仲間たちが自分の意見がない。残念だけど、そういう状況になっても、自分の問題だと考えてくれないと仕方がない。考えてもらうことを期待しています。

三澤 今日は長時間、ありがとうございました。今後よろしくお願いたします。

■日時：2006年8月3日（木）

■場所：第一今日の会（神奈川県横浜市）



〈自立体験室の利用について〉

イルカには、自立生活プログラム受けている方が、一時的に宿泊体験をするための自立体験室があります。また、県外の方(臨時会員等)が短期で利用することも可能です。

宿泊代：一人1泊 1,500円

受付：前もって事務所にご連絡ください。

〈会員制〉

イルカは、サービスを受ける人、提供する人、そして、イルカを影で応援して下さる方々が相互扶助の精神で共に支えあって運営している会員制の障害者主体の当事者団体です。
※会費は保険、機関紙、ILP、その他活動費に使われています。

賛助会員	個人・年間：3,000円 団体・年間一口：10,000円 ※賛助会員は個人・団体何口でも可
※賛助会員は毎年更新制です。	
臨時会員	会費一回事に：2,000円

〈事業・活動内容〉

1. 指定相談支援事業 (障害者総合支援法)
2. 指定特定相談支援事業 (障害者総合支援法)
3. 指定一般相談支援事業 (障害者総合支援法)
4. 障害児相談支援事業 (児童福祉法)
5. 障害者権利擁護事業
6. 自立生活プログラム
7. ピア・カウンセリング
8. 啓蒙活動
9. 成年後見法人後見事業
10. その他障害者自立支援全般



障がいがあってもなくても
みんなが暮らしやすい社会の実現に向けて

NPO法人
沖縄県自立生活センター・イルカ



〈連絡先〉

〒901-2221
沖縄県宜野湾市伊佐4丁目4番1号1F
TEL: 098-890-4890
FAX: 098-897-1877
E-MAIL: chanpule@nirai.ne.jp
http://w1.nirai.ne.jp/chanpule/

あなたがいつも想い描いている夢があるよね
その夢 夢で終わらせるの？
それとも本物にする？

未知のチャレンジって怖いよね
でも少しでも勇気を出して
その一歩を踏み出してみよう
その一歩こそが あなたの勇気になるから

怒っていいんだよ 泣いていいんだよ
でも 今度は思いっきり笑ってみようか
生きることって 結構楽しいかも

幸せの黄色い花 咲かせてみて
そして 幸せの種を 天高く飛ばそうよ
きっと あっちこっちできれいな花
いっぱいになるだろう



お気軽にお問い合わせください。

〈連絡先〉

特定非営利活動法人 PAIおきなわ

〒901-2221
沖縄県宜野湾市伊佐4丁目4番1号(1F)

☎ (098) 890-1895

FAX (098) 897-2094

e-mail applepai@nirai.ne.jp

指定居宅介護/
重度訪問介護事業所 (障害福祉サービス事業)
指定訪問介護事業所 (介護保険事業)

ピーエーアイ

PAIおきなわ



特定非営利活動法人 PAIおきなわ

「三澤了さんの遺志を継ぐ会」の趣旨へご賛同いただいた皆さま

(敬称略)

賛同人

U.G.サトー、秋山哲男、秋山浩子、浅井貴代子、東智樹、雨宮由紀枝、荒木薫、池内洋、池原毅和、石毛鑢子、石橋宏昭、磯崎章一、一木玲子、伊藤清市、伊東弘泰、伊藤葉子、今西正義、伊良原淳也、臼井久実子、内海旬子、江戸徹、大熊昭、大熊由紀子、太田修平、大濱眞、小笠原晶子、岡部耕典、岡みどり、岡本直樹、小川加代子、小川喜道、奥平真砂子、小倉國夫、小田切督剛、尾上浩二、海江田万里、片岡次雄、勝力男、勝又幸子、河合俊宏、川内美彦、川口有美子、川田龍平、河野達男、菊地敏明、金政玉、金城太亮、国松秀樹、黒岩海映、黒崙隆、小島功、小林幸治、小林洋子、小林律子、込山光廣、崔榮繁、斎藤明子、斎藤省、斎藤亮人、坂上正司、佐々木浩一郎、篠原由美、下村明子、白江浩、白崎一裕、白戸一秀、鈴木孝光、瀬山紀子、高橋博、瀧沢彰子、竹端寛、立岩真也、田村和久、千葉寿夫、土屋葉、棟達也、直井ふみ子、中島直、長瀬修、中西由起子、那須里美、西村正樹、萩原直三、朴明子、朴賛五、橋本みさお、畑康久、原田潔、春田文夫、平野みどり、ファン・ペンナム、福島睦子、藤岡毅、藤原久美子、松井亮輔、圓山里子、三ツ木任一、三星昭宏、宮松昌代、宮本泰輔、村山美和、盛上真美、八柳卓史、八藤後猛、柳館孝信、矢吹文敏、山口博之、山崎恵、山下幸子、山田昭義、山名勝、山本眞理、八幡孝雄、横路孝弘、横路由美子、米内山昌孝、頼尊恒信、我妻武、渡部繁子、匿名3名

計 123名

賛同団体

CILおのみち、CILくにたち援助為センター、CIL神戸Beすけっと、CIL下関、CIL自立の魂～略してじりたま!～、CILたすけっと、CILちょうふ、CILふちゅう、CILもりおか、DPI女性障害者ネットワーク、NPO法人ALS/MNDサポートセンターさくら会、NPO法人CILだんない、NPO法人CIL町田ヒューマンネットワーク、NPO法人あいえるの会、NPO法人あるる、NPO法人神奈川県障害者自立生活支援センター、NPO法人奏海の杜、NPO法人コミュニティサポート研究所、NPO法人こらーるたいとう、NPO法人サポート南多摩、NPO法人市民がつくる政策調査会、NPO法人障害者生活支援センター遊び雲、NPO法人自立生活センター・昭島、NPO法人自立生活センターアシストMIL、NPO法人自立生活センターくれぱす、NPO法人自立生活センター・小平、NPO法人自立生活センターSTEPえどがわ、NPO法人自立生活センターたいとう、NPO法人自立生活センター立川、NPO法人自立生活センターてくてく、NPO法人自立生活センターとちぎ、NPO法人自立生活センター・東大和、NPO法人自立生活センターヒューマンネットワーク熊本、NPO法人自立生活センター福岡、NPO法人自立生活センターほくせつ24、NPO法人自立生活センター松山、NPO法人自立生活夢宙センター、NPO法人スタジオIL文京、NPO法人すてっぷ、NPO法人ソーシャルアクション・パートナーシップ、NPO法人たけのこ会、NPO法人中部障害者解放センター、NPO法人日本障害者・高齢者生活支援機構、NPO法人ムーブメント、NPO法人メインストリーム協会、NPO法人ユートピア若宮、NPO法人リアライズ、愛知県重度障害者団体連絡協議会、大阪青い芝の会、株式会社

生活書院、株式会社全国通販、株式会社ドリームプロジェクト、株式会社ユーダ、京都頸髄損傷者連絡会、公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団、公益財団法人ダスキン愛の輪基金、静岡障害者自立生活センター(NPO法人ひまわり事業団)、自治労東京都庁職員労働組合、社会福祉法人あいえる協会、社会福祉法人AJU自立の家、社会福祉法人幹福社会、社会福祉法人幹福社会ヘルプ協会たちかわ、社団法人ゼンコロ、障害者欠格条項をなくす会、障害者サポートセンター together 広島、障害者自立生活センター・IL-ism、障害者生活支援センターぐつとらいふ、障害者生活支援センター・てごす、障害者の自立と完全参加を目指す大阪連絡会議、障害者の生活保障を要求する連絡会議、障害者問題を考える兵庫県連絡会議、障害児を普通学校へ・全国連絡会、自立生活センターアークスペクトラム、自立生活センター・いこらー、自立生活センターいろは、自立生活センター宇部、自立生活センター Com-Support Project、自立生活センター十彩、自立生活センター HANDS 世田谷、自立生活センター日野、自立生活センター Ping あおもり、自立生活センターほつとらいふ、自立生活センターまんだ、自立生活センターリングリング、全国青い芝の会総連合会、全国頸髄損傷者連絡会、全国障害者解放運動連絡会議、全国自立生活センター協議会、全国「精神病」者集団、全日本自治団体労働組合、ティグレ連合会、日本教職員組合、日本自立生活センター、日本労働組合総連合会、ヒューマンケア協会、福島頸損友の会、福祉労働編集委員会、部落解放同盟中央本部

計 98団体

(2014年3月31日現在)

営業・企画／デザイン・DTP・印刷の各部門のエキスパートが「同一社屋内」
ですばやい対応を実現。

Planning
企画



Design
デザイン



DTP
データ作成



Printing
印刷

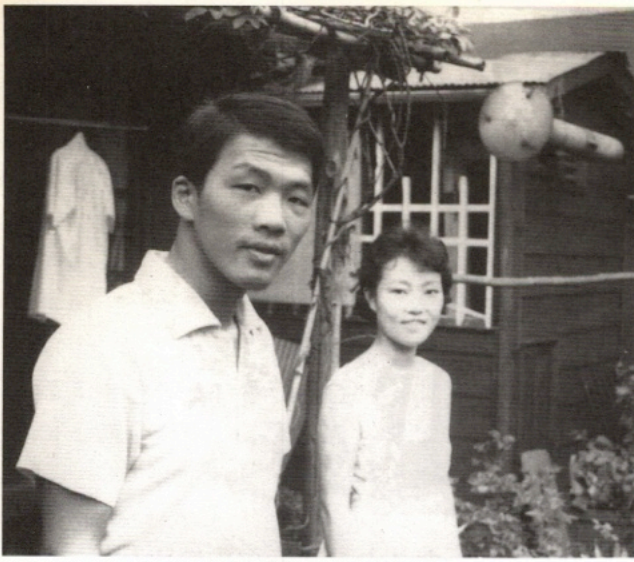
事業内容

出版印刷部門 書籍、雑誌、参考書、医学書、専門書など
商業印刷部門 カタログ、パンフレット、ポスター、リーフレット など

株式会社 教文堂

〒162-0804 東京都新宿区中里町27番地

TEL: 03-3260-6136 (営業部) FAX: 03-3260-6158 <http://www.kyoubundo.co.jp/>



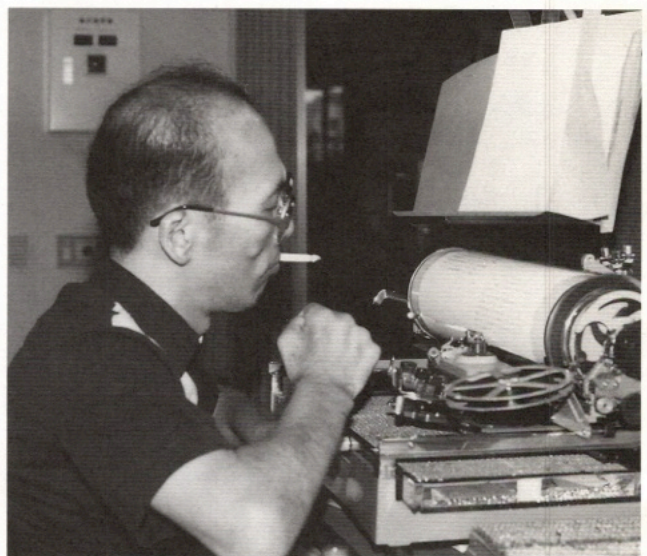
1962年頃(20歳)、受傷前の三澤さん(左)とお姉さん



1980年代後半、アパート兼頭損連事務局にて(戸山ハイツ)



1986年施設費用徴収反対6・30全共闘厚生省行動。奥左、白石清春氏と三澤さん(右)



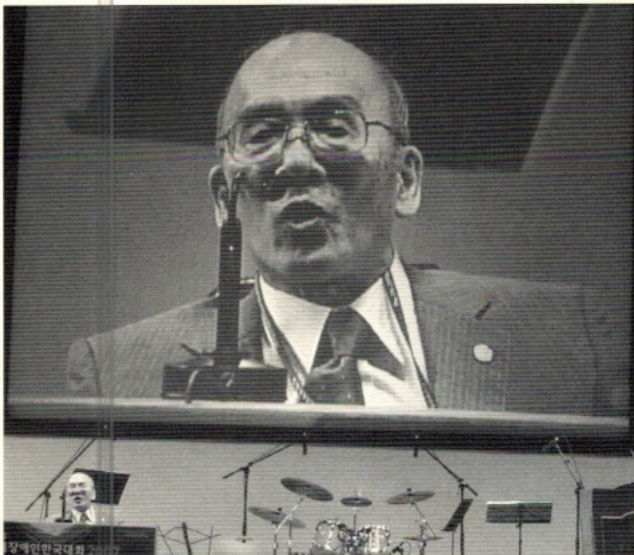
1980年代、和文タイプ



1986年施設費用徴収反対闘争。マイクを持つ三澤さん(中央)と太田修平氏(右)



1987年頃、国連・障害者の十年中間年関連イベント、海外の動向に学ぶ国際セミナーにて。三澤さん(中央)と今西正義氏(右)



2007年第7回DPI世界会議韓国大会で挨拶する三澤さん。日本から約300人が参加

と！10・28JDF大フォーラム
フォーラム (JDF)



2011年10月28日JDF大フォーラムにて三澤さん[JDF提供]



2013年6月8日、3時のラジオ体操。腕を前から横に開いて大きくそら〜す♪



2008年10.31大フォーラムにて三澤さん



2008年2月25日、障害者の地域生活確立の実現を求める全国大行動(大行動)。前列左から尾上浩二氏、三澤さん、後列左から細井清和氏、宮本泰輔氏、一人置いて横山晃久氏



2004年6月9日大行動。先頭左から南館こずえ氏、三澤さん、内海句子氏

1971年6月17日第三種郵便物認可（毎月6回5の日・0の日発行）
2013年3月31日発行 DPI日本会議 『われら自身の声』SSK増刊通巻第4383号
発行人 障害者団体定期刊行物協会 〒157-0073 東京都世田谷区砧6-26-21
編集人 DPI日本会議 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-11-8 武蔵野ビル5階

